

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

老津

豊橋校区史

29

Oitsu







校区のあゆみ 老津

老津の風景 今・昔

海があった老津

今、老津の北西には工業地帯が広がっている 昔⇒今
かつて、ここには遠浅の美しい海があった



多門田の海(昭和30年代)、その海も埋め立てられ今は工業地帯となっている(平成17年)

老津公園

鈴木新兵衛酒造店の敷地が昭和61年老津公園 昔⇒今
として整備された



大正時代の鈴木新兵衛商店(酒造業)



国道259沿いに整備された老津公園(平成17年)

今下の町

昔⇒今



昭和30年頃の今下通り



現在の今下通り(平成18年)

老津の四季



春 4月になると老津駅付近の線路沿いに桜並木が出現する



初夏 老津神社横の坂道を上ると小学校と公民館がある



春 田植えの準備が始まる。農地には温室が立ち並んでいる(聖ヶ谷)



夏 高山池の夏、池のほとりには市営池上住宅が建っている



秋 実りの秋、コンバインが大活躍(聖ヶ谷)



温室では季節を問わず各種の野菜や観葉植物が栽培されている



冬 冬になると一面にキャベツ畑が広がる(西高縄)

老津の文化遺産

伝統を受け継ぐ笹踊り

「天王と一と申するは、日本一の荒神だ—
安養寺の縁の下、いたちのせがれが12匹—」



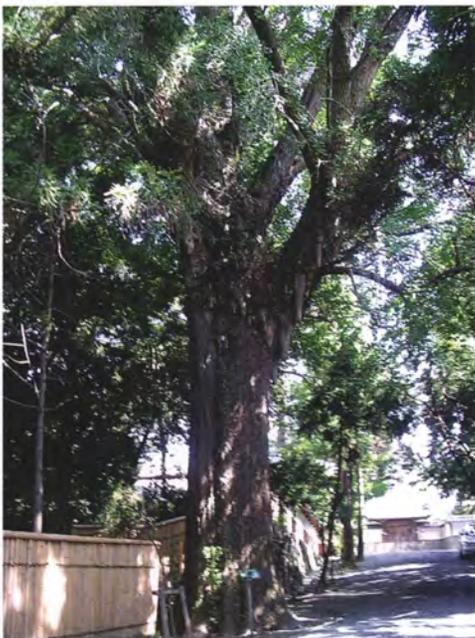
老津神社の例大祭に奉納される笹踊り

東三河の名刹 太平寺

平安時代の終わり頃に建てられた名刹、
広い境内の石垣や古木、堂々たる本堂の
姿は歴史の重みを感じさせる



太平寺本堂



豊橋の巨木・名木100選の銀杏の木



家康ゆかりの「あかずの門」



市内最古の銅鐘（市指定文化財）

老津の年中行事



▲老津神社の例大祭 (10月)



▲盆踊り大会 (小学校運動場 8月)
 校区運動会 (小学校運動場 10月) ▼



▲敬老会 (公民館 9月)



▼成人式 (公民館 1月)



▲文化祭 (公民館 11月)



▶節分豆まき (老津神社 2月)

発刊によせて



平成 18 年度
豊橋市総代会長
西 義 雄

このたび、豊橋市制施行 100 周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100 年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51 校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた 100 周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この 100 周年記念事業を一過性のものにと終わらせるのではなく、次の 100 年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成 18 年度
老津校区総代会長
鈴 木 敬

豊橋市総代会では、100 周年を記念して豊橋校区史「校区のあゆみ」を編集することになり、老津校区も協賛して“校区のあゆみ老津”を刊行しました。

老津校区には、平成 2 年 3 月に発行されました“郷土誌老津”があります。この度刊行しました“校区のあゆみ老津”は“郷土誌老津”を基に編集しました。

昔から老津は、自然が豊かで農業の盛んな素晴らしいところです。古くは大津と呼ばれ、海上交通の要所であり、古事・伝説の豊富な由緒ある町です。

この歴史と伝統を探訪し、先人の努力と苦労から多くを学び、これからの老津のあり方を見直してまいりたいと考えます。

現在、老津校区の抱える課題は、交通事情の改善であります。国道 259 号線バイパスを初め、幹線道路の整備と用排水の整備を含めた土木関係問題の処理にあります。

また、ごみ問題をはじめ、公民館、集会所の点検、修復や大災害に対応するマニュアルづくりと避難訓練等、取り組まなければならない事柄は山積しております。

多くの情報を共有し、親しまれる総代会として努力してまいります。校区の皆様のご絶大なご理解とご協力をお願いします。

みんなで住みよい老津を築きましょう。

発刊によせて

目次

第1章 自然と環境	7
1 校区の位置・面積・地名・人口	7
2 土地のようす	8
3 気候のようす	10
4 交通のようす	10
第2章 歴史と生活	12
1 老津のあゆみ	12
(1) 老津のあけぼの	12
(2) 古代から中世	13
(3) 江戸時代	13
(4) 明治・大正・昭和(戦前)	14
(5) 昭和(戦中・戦後)	15
(6) 新しい時代へ	16
2 産業	17
(1) 農業	17
(2) 商業・工業	20
3 校区の活動	22
(1) 総代会の組織と校区費	22
(2) 総代会の活動	22
(3) 校区の行事	23
(4) 校区内団体の歴史と活動	25
(5) 公共施設	26

第3章 教育と文化	28
1 学校教育・保育	28
(1) 老津小学校	28
(2) 農業補修学校・青年学校	31
(3) 章南中学校	32
(4) 家政高等専修学校	33
(5) 老津保育園	34
2 社会教育	36
(1) 青少年教育	36
(2) 生涯教育	38
3 史跡と文化財	39
(1) 古墳と古墳群	39
(2) 老津周辺の遺跡	40
(3) 老津の古窯群	41
(4) 老津の3古城	41
(5) 老津の古社寺	42
4 人物、昔話	45
(1) 老津の偉人	45
(2) 老津の昔ばなし	47
関連写真	49
編集後記	52

表紙写真 老津神社例大祭に奉納される笹踊り



第1章 自然と環境

1 校区の位置・面積・地名・人口

(1) 校区の位置

隣接する校区 老津校区は渥美半島の付け根にあり、豊橋市の中心から南西の方向に位置する。

東は大清水、富士見、南は高豊、西は紙田川を境にして杉山、北は境川を挟んで大崎の各校区に接している。

緯度と経度 北緯34度41分34秒、東経137度20分8秒に位置している。

行政上の位置 老津校区は明治から昭和30年(1955)まで渥美郡老津村であったが、昭和30年の町村合併で豊橋市老津町となり、現在に至っている。

(2) 校区の面積

海があった頃は13.1km²であったが、現在は約6.1km²である。

江戸時代からの海面争いがあり、新田開発、池上・大津島の開拓、軍による島の買い上げ、明海地区の埋立てなどにより、少しずつ変化しながら現在に至っている。

(3) 老津の地名と字名

大津から老津へ 老津は昔、大津と呼ばれていた。大津とは大きな港という意味で、古来地名に「津」とつく所は多くは湊であったようである。

昔の老津には、波静かで安全な船着場があり、この地方の海上交通の要衝であった関係から、自然に大津と名づけられたと思われる。

大津の地名がいつ頃から使われたかは明らかではないが、平安時代末(12世紀後半)に

なって大津の名が初めて文献に登場しているので、地名の起こりはそれ以前のことと思われる。老津は古くから著名な土地柄であった。

そして、明治9年(1876)南大津、北大津、森崎新田を合併して一村とした時から老津村となり、「老」の字を用いるようになった。

老津の字名 波入江、中尾、中北、大津中、森崎、多門田、岩塚、聖ヶ谷、向田、今下、高縄代、新居、新田、池上に池上住宅が加わり、現在校区内にある行政上の字は15字となっている。

(4) 校区の人口と移り変わり

平成17年の人口は3,987人、世帯数は1,165世帯となっている。

人口の移り変わりをみると、江戸時代1,000～2,000人、明治時代2,000～3,000人、大正以降3,000～4,000人と、緩やかに増加してきたが、現在はほぼ横ばいに推移している。

世帯数と人口の移り変わり

年号	世帯数	人口(人)	出典
元禄10	135	1,269	大津村差出帳
正徳2	205	1,528	〃
明治9	480	2,277	老津村沿革誌
明治23	492	2,811	〃
大正5	530	3,110	〃
昭和15	521	3,004	〃
30	692	3,962	国勢調査
40	789	4,031	〃
50	830	3,941	〃
60	890	3,949	〃
平成7	896	3,790	〃
12	968	3,770	〃
17	1,165	3,987	豊橋市市民課資料

2 土地のようす

(1) 土地の高低

なだらかな地形 老津は渥美半島のつけ根部分に位置し、町の東部の高い位置にある池上から西の三河湾の方向に緩やかに傾斜しながら低くなっている。

校区の主な地点の海拔 平成10年の国土地理院発行の地形図によると、校区の主な地点の海拔は次のようになっている。

豊橋南部浄水場	36.1m
中西病院	22.6
嵩山池	21.5
老津小学校	16.0
老津町公民館	15.5
老津神社	15.1
太平寺	14.0
桂昌寺	13.5
家政高等専修学校	13.5
章南中学校	13.4
多聞院	12.3
大雲寺	8.2
老津駅	3.9
老津郵便局	3.5

(2) 島と海

大津島 おおつしま 現在、老津の北西には明海 あけみ の埋立て工場地帯が広がっている。

かつて、この地域に遠浅の美しい海や、大小の島々が存在したことを記憶する人々は次第に少なくなってきた。

昔の「三河国大津名蹤綜録」 おおつめいしやうそうろく には23の島の名称が記されており、この島々の中で一番大きく、老津の人々との関わりが深かったのが大津島である。大津島では大正以前から田畑の耕作や養魚が行われていた。

第二次大戦後の大津島 昭和13年(1938)、豊橋海軍航空隊建設用地として大津島の買収交渉が始められた。軍に関係することなので、地元は否応なしであった。

昭和13年夏には測量が始まり14年春に着工され、15年には八角形という変わった形の島として一応の完成をみた。17年には滑走路

の一部が完成し、18年4月には航空隊全般の施設が完成した。

第二次大戦後、地元の大崎・老津では農林省へ陳情を行い、飛行場の払い下げに成功した。

払い下げられた飛行場と大津島は大崎・老津両村の希望者に分配され、砂利ばかりの田畑であったが、米の出来はよく反当り約8俵の収穫があった。



8 角形の飛行場と大津島 昭和36年国土地理院

消えてしまった大津島と海 三河湾では昭和30年以降三河港用地造成工事計画が次々に打ち出され埋立てが進められた。大崎・老津の海も昭和44年度から48年度にかけて埋立て工事が行われ、昔の大津島・海・舟入れ(舟かけ)などの姿が消えてしまった。

かつては遠浅の美しい海が広がり、遠くに笠山 なご が眺められた風景も、今は工場が建ち並び、その向こうには白い巨大な風力発電の風車が林立する風景へと変わったのである。



明海の工場地帯と風力発電の風車

(3) 池と川

数多くの溜池 大正4年(1915)の「老津村誌」には11ヶ所の溜池の名称が書かれている。どの池も豊川用水通水以前には灌漑用水池として、大きな役割を果たしていたが、通水以後はその役割を終え、今ではガマやセイタカアワダチソウ、ハスなどが繁茂している。

生活の場としての川 大正の頃の「村誌」に紙田川、清水川、境川の位置・水量・川幅・水源・全長について記されている。三つの川はいずれも水量が少なく、川幅も狭かったようである。



紙田川

また、「耕地整理誌」によると主要排水路は、清水川排水路(水源は嵩山池)・八郎治排水路(前田池・向田池)・境川排水路(石穴池)があった。

これらの川や水路は昭和45年頃までは人々の生活の場であり、憩いの場でもあった。

(4) 森と木

校区に残る森林は社寺林、防風林、屋敷林などであり、常緑広葉樹や落葉広葉樹の天然・人工林が点在している。

強い西風を防ぐ防風林 波入江から新田にかけて防風の役目をする自然林(雑木のやぶ)が続いている。

また、昭和44年(1969)から始まった三河湾の埋立てに伴い、旧海岸堤防と東三河臨海道路の間に防風と景観づくりを兼ねた幅17~60mの遮断緑地が造られた。

校区の名樹・古木 老津校区には珍しい樹木は少ないが、社寺林や屋敷林には大木・古木が点在している。

豊橋市制100周年記念の「とよはしの巨木・名木100選」に本校区から太平寺の大銀杏と

祥雲寺の蘇鉄の2本が選ばれた。

太平寺の大銀杏 この大銀杏は太平寺境内参道左側にあり豊橋市の銀杏の中では最も太い木である。昭和33年(1958)刊行の「老津村史」に、「目通り27m60、枝下6m70、周囲4m07、樹齢350年を経て樹勢増々旺ん。天に沖するばかりにそびえ、葉は生い茂り、秋にはおびただしい実をつけ、枝にはその樹齢を示すかのように銀杏特有の大きな「乳」がたれさがり、その樹齢の古いことが推察される」との記述がある。

太平寺住職彦坂宗丘さんは「樹齢400年くらいになっているだろう。大崎の竜源院のお葉つきイチョウはその種が珍しいが、太さや樹齢は似たようなものではないか」と語っている。



太平寺の大銀杏と乳

祥雲寺の蘇鉄 本堂の前に2本の蘇鉄があり、西側にある蘇鉄が100選に選ばれた。

平成2年刊行の「郷土誌老津」に「昭和21年登呂遺跡発掘調査の帰路、当寺を訪れた東京大学巨理俊次博士は蘇鉄の巨木であること、開花が珍しいことを賞賛した」との記述がある。花は8月頃に咲く。

このほか本校区には、今下観音堂の銀杏、



祥雲寺の蘇鉄

太平寺や老津神社のシイ、屋敷林のタブやイヌマキなどの古木がある。

3 気候のようす

(1) おだやかな気候

渥美半島は黒潮流れる太平洋と三河湾に挟まれている。老津は渥美半島の三河湾側にあるため、四季を通じ比較的温暖な気候になっている。雪はまれにちらつく程度で積もることはほとんどない。

気温と降水量 年平均気温は16℃前後で、気温年較差は22℃ほどである。降水量は年間およそ1,600ミリで、雨量は春から夏にかけて多くなっている。

風速と風向 豊橋市を吹く風は、夏季は平均風速2m前後と比較的おだやかであるが、冬季になると平均風速が4m前後となり、強い西風が吹く日が多くなる。冬の気温が比較的高いのに寒く感じられるのはこのためである。年間を通じ最もよく吹く風は西風である。

天候のことわざ 老津の人々は長年、天候に左右されやすい農業と漁業に生活の糧を求めてきたので、常に気象の変化に敏感であった。

〔気象に関することわざ〕

- ・雲がくだると天気よく、雲がのぼると雨
- ・うろこ雲が出るると雨が近い
- ・城下沖から来る黒雲は雨が近い
- ・蔵王山に雲がかかると雨
- ・西風が吹くと天気が良い
- ・東風（こち）が吹くと雨
- ・入日がよいと次の日は晴れ
- ・お月様が赤いと天気が良い
- ・月が笠をかぶると雨、笠の中に星があれば晴れ
- ・朝焼けはその日の雨、夕焼けは翌日の晴れ
- ・朝虹その日の雨、夕虹翌日の晴れ
- ・朝霧が出ると天気が良い
- ・遠くの山が浮いて近く見えると雨
- ・電車の音が近いと雨
- ・太平寺の鐘がよく聞こえると次の日は雨
- ・赤沢沖に波の音が聞こえるのは台風接近
- ・神経痛が痛むと天気が悪い
- ・庭や土間、コンクリートがしけると雨
- ・猫が顔をなでると雨
- ・猫の鼻がぬれていると雨
- ・雨蛙がなくと雨、雨蛙が木の上に居ると雨
- ・小さな虫が目の前を無数に飛ぶと雨が近い

平成2年刊『郷土誌老津』より抜粋

4 交通のようす

(1) 交通の便のよい老津

校区内を国道259号線が東西に通っており、現在バイパス工事が進められている。自動車では豊橋市街へ約30分、伊良湖へ約60分で行ける。

公共交通機関としては、豊橋鉄道渥美線と豊鉄バス路線があり、本校区は比較的交通の便に恵まれている。

(2) 交通の移り変わり

自転車と人力車 明治時代の老津村民が遠出する時は徒歩が中心であったが、明治後期には新しい交通手段として自転車が利用された。

このことは「老津村史」(昭和33年刊)に、「明治39年(1906)初めて鈴木新兵衛酒造店にスイフト号自転車が購入され、続いて43年伴医院が購入した」とある。

その後台数も増え、大正12年(1923)には337台となり、多くの村民の足となった。

その他の交通手段としては人力車があったが、利用者は一部の人に限られ、一般の人はほとんど利用しなかった。老津では、明治中期より大正末期にかけて、豊田伊蔵や戸塚万作によって営業されていた。

乗合馬車 自転車や人力車が交通手段の主力であった頃の大正5年(1916)、一度に大勢乗れる乗合馬車が、豊橋～田原間に開通した。

ラッパを吹いて走る馬車は子供たちに人気があったが、大正13年の渥美線開通とともに姿を消してしまった。

船 海があった老津にとって船も交通手段の一つであった。明治初期のころ6人乗りの帆船が田原～牟呂間を航行し、明治33年(1900)には石油発動機船が老津にも寄港した。

大正6年(1917)には牟呂、福江両港に参勢巡航株式会社が設立され、蒲郡、半田などへの蒸気船の航路が開かれ、老津からも田原、牟呂を経由してこれらの航路を利用すること

ができた。

しかし、大正6年10月の森崎海岸沖の転覆事故や大正13年の渥美線開通などの影響で利用者が激減し、長い間村民に親しまれたメーター蒸気船もその姿を消すことになった。バス（乗合自動車）バスがこの地区に走り出したのは大正4年（1915）のことである。

「豊橋鉄道50年史」によると「さまざまな会社が営業を開始したが、昭和9年（1934）豊橋自動車株式会社がこれらを買収して半島の自動車網を一手に握った。しかし、当時はなにぶんにも乗客が少なかった。乗合馬車が豊橋～田原間25～30銭のところ、バスは60銭、しかも『雨天泥路ノ際ハ二割増』のところもあったから、相当の金持ちでも、贅沢だといって乗らなかった」とあり、当時のバスのようすがうかがえる。

その後、利用者が増えたものの、マイカー時代の到来とともに昭和43年（1968）をピークに利用者が減り続け、昭和46年にワンマンバスになるなど合理化を図りながら運行が続けられている。

平成元年ころは老津のバス停には上下合わせて58本のバスが停まっていたが、現在は16本に減ってしまった。



国道259線を走る豊鉄バス

電車 老津に電車（渥美線）が通ったのは大正13年（1924）のことである。

老津の人々の足として、激動の昭和とともに歩んできた渥美線は、その時々を時代を反

映してきた。戦後、老津はキャベツやスイカの産地になり、駅は野菜の出荷でにぎわった時期もあった。



昭和30年代
の老津駅



現在の老津駅

老津駅の乗降客数のピークは昭和40年代前半で、その後マイカー時代に入って人々の足は電車から遠のき、乗降客は減っていった。

その後、ダイヤ改正、運転本数の増加、スピードアップ、車両の改善なども行われたが、乗降客の減少は続いており、平成18年では、1日あたり利用者数は662人であった。

電車は15分間隔で運転されていて、新豊橋まで約23分、三河田原まで12分で行ける。運賃は新豊橋まで330円で、高齢者や通勤・通学の重要な足となっている。

老津駅一日当り乗降人員（人）

年号	乗車	降車	合計
平成5年	507	527	1,034
6年	508	512	1,020
7年	502	459	961
8年	507	478	985
9年	487	388	875
10年	463	510	973
11年	496	486	982
12年	422	419	841
13年	480	421	901
14年	415	439	854
15年	433	420	853
16年	418	433	851
17年	359	392	751
18年	314	348	662

豊橋鉄道提供

第2章 歴史と生活

1 老津のおゆみ

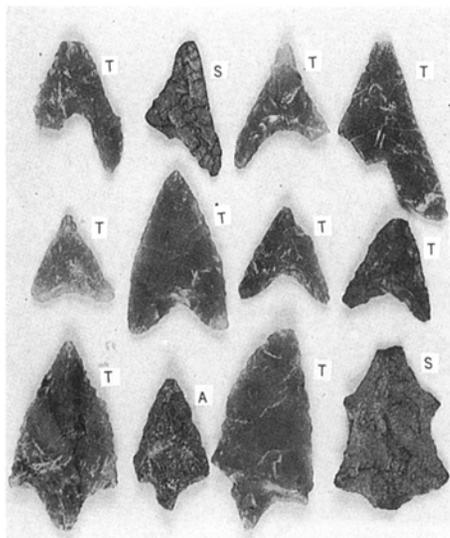
(1) 老津のあけぼの

老津をかける狩人たち 飛原（老津町東聖）の畑から「搔器」とよばれる、動物を調理するための石器が採集されている。これは旧石器時代に盛んに用いられ、縄文時代の始まり頃まで使われていた石器である。

飛原は清水川沿いの台地に位置し見晴らしもよく、湧水も豊かである。このあたりを駆けまわって獲物をねらった狩人たちの居住地として適していたのであろう。

縄文時代の土器は、老津では見つからないが、石鏃は御山塚、向田、東聖、一本木、新居など各地で採集されている。それらは縄文時代各期のものがあり、そこは長い年月の間、居住地であったと考えられる。

いずれも眺めのよい高台であり、近くには豊富な湧水があるところが共通している。



向田で出土した石鏃 彦坂吉郎氏蔵

米づくりの始まり 昭和44年頃、波入江の祥雲寺裏山から壺が出土している。この壺は瓜郷式土器といわれるもので、米づくりを始めたころの弥生式土器である。

「老津村史」には、「老津の貝塚」として「所々にあったということであるが、明治20年前後、神野新田が築堤された際、貝俵として運び去られたということである。しかし中尾の貝塚だけはそのまま残っている。中尾東方高地の伴藤九郎（旭）氏の住宅付近一帯である。大正15年（1926）の秋、波入江の原田新治氏が畑普請を施した際、その一部から石斧を掘り出している」と記されている。

この石斧は木材を伐採したり、削ったりするときの石製工具として、弥生時代に使用されていたものである。

これらのことから、老津と大崎の境界を流れる境川周辺の湿地帯には、弥生時代の集落があり、米づくりが行われていたと考えられる。

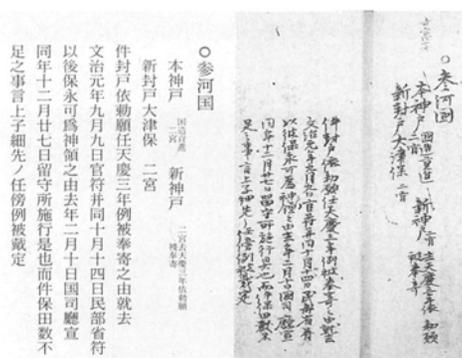
老津の古墳群 3世紀末ごろから7世紀にかけて、人々を支配した豪族の墓の古墳が老津でも発掘されている。

梅田川の南の地域では、老津、植田、大崎に古墳群がつくられている。そのうちでも、老津古墳群は最大であり、13基ほどの古墳の位置が確認されている。

中でも妙見古墳は、豊橋市内で最大級の前方後円墳である。紙田川や清水川の河口から海、そして流域の水田を広く見渡せる台地に築かれている。この古墳の主は、強大な権力を持って支配していたと思われる。

(2) 古代から中世

伊勢神宮領の老津 「皇太神宮建久己下古文書」に「三河の国大津保を伊勢二宮（外宮、内宮）の新しい封戸とすることを、文治元年（1185）付で諸国に官符を下した」と記している。このことから老津は、伊勢神宮という強大な荘園領主の庇護のもとにおかれ、地頭職権限不入地の大津神戸となった。大津の名が初めて文献に登場した。



皇太神宮建久己下古文書 豊橋美術博物館提供

戸田氏と老津の古城 渥美半島の伊勢神宮領は、南北朝の動乱前後から武士の侵略にさらされるようになる。

大津神戸は文明7年（1475）、碧海郡上野城主の戸田宗光の支配下となる。さらに、今川氏の支配から松平氏へと移り変わっていく。

老津の古城は、戸田氏が在地領主として当時、東三河を治めていたころ築いた城である。

高縄城（大津城） 戸田宗光が田原城に移るまでの3年間の在城であった。田原の前衛地として重要な城であったと推察される。

城跡を想定するものはなくなりつつあるが土塁や空堀はわずかに残っている。

波入江城 祥雲寺境内の一带であったと考察されている。昭和30年代までは、空堀や井戸址が確認されたが現在はなくなっている。

北浦城 大崎城から田原を結ぶ三河湾沿の南北の防衛拠点であった。戸田氏の支城の中では、最も後期に築かれたものである。往時の遺構は全く消失している。

(3) 江戸時代

吉田領大津村 「豊橋市史」によると、大津村は江戸時代の初めごろ、旗本戸田清堅の領地であった。その後、寛永4年（1627）から豊後日田藩領（大分県）になり、さらに10年（1633）には、天領として代官鈴木八右衛門の支配下に置かれている。11年頃藩主水野忠清の時、吉田藩領に加えられ幕末に至っている。

その間、南大津村と北大津村の二か村に分かれたり、元禄10年（1670）から89年間は大津村一村となったり、南北大津村と森崎新田の三か村になっていたりしている。

御差出帳にみる老津 8代将軍徳川吉宗のころの享保14年（1729）に、大津村から松平豊後守へ提出した差出帳から、18世紀初めごろの大津村のようすを見てみよう。

人口1310人、戸数241戸、村高は本田畑144町8反8畝23歩（1町は約1ha）で、石高1656石1斗6合（1石は約180ℓ）と、新発田畑16町6反2畝4歩で、石高153石6斗6升9合の収穫をあげていた。

寺は8か寺あり禅宗長松山太平寺が中本山として勢力を誇っていた。当時の村人は寺請制度により檀家としていずれかの寺に属していた。また、民間信仰も強く、さまざまな信仰が広まっていた。高縄代、聖ヶ谷の地藏堂、岩塚の十王堂、波入江の薬師堂などの信仰は現在も生き続けている。

二川宿の助郷村 大津村が二川宿の助郷村になったのは、享保10年（1725）と思われる。

二川宿25か村の助郷総高は13,692石であり、そのうち大津村の助郷高は900石であった。900石に対して割り当てられた人足は22人（時には113人）、馬7頭であった。

助郷役は春秋の農繁期とかち合うことが多く、人足は15才以上60才以下の働きざかりの者でなくてはならなかったことなど、大津

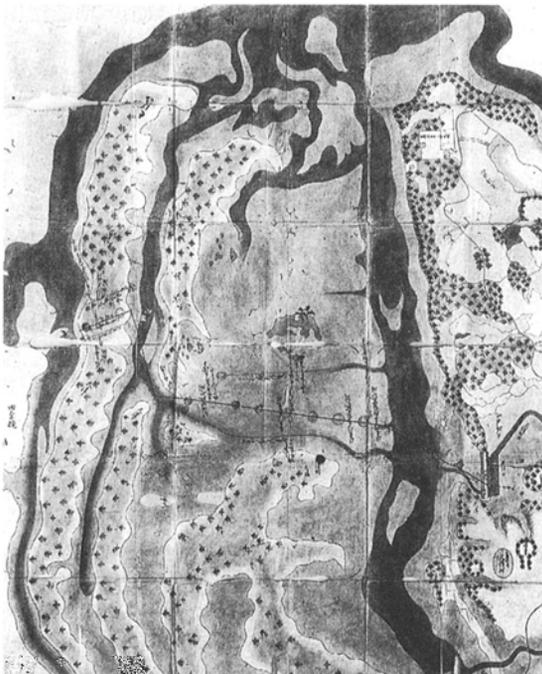
村にとっては大きな負担であった。

隣村との争い 江戸時代には、海や山の境をめぐって隣村との争いが度々あった。特に藻草を田畑の肥料にしているため大崎村、杉山村との間で、干潟の境目をめぐる争いが発生している。

寛文10年(1670)、大崎村との間で海面地境について争っている。争いの解決は、大津村には有利ではなかったようである。大津村が1/3、大崎村が2/3の裁許(役所の決定による解決)で、絵図上に杭と間数が記入され境界の線がはっきりと墨で引かれた。

明和2年(1765)には「大津村・杉山村藻草争論内済願」が大津村、森崎新田より吉田藩の奉行に提出されている。その内容は「杉山村が大津村の海内に入り藻草を採るので困る。杉山村は藻草などを採らないようにしてもらいたい」という訴えである。

裁許の結果は「大津村側には、藻草採りの場所がたくさんあるので、言い分は成り立たない」という裁定で、これも絵図に両村の境界線が引かれた。



大津村・大崎村境論済口証文絵図 老津区有文書

(4) 明治・大正・昭和(戦前)

老津村の誕生 明治9年(1876)、南大津・北大津・森崎新田を合併して老津村となる。

明治22年(1889)、町村制実施により役場(小学校正門東)を建設した。

この年、村会議員と村長選挙が行われ、初代村長に中西重平氏が当選し、本格的な地方自治が始まった。

老津村総面積の約84%が耕地(田畑)であり、西に浅海をもつ本村では、農耕に励むかたわら、合間を見て貝を採る等漁業もしてきた。

「村誌」によると、明治9年(1876)の村の戸数は480戸、人口2,277人である。

村の主な産物は米1,282石、麦1,772石、さつまいも58,895貫、大根35,459貫をはじめ、大豆、粟などの農作物とあさり233石をはじめとした魚貝類である。

採藻船248隻を持ち、藻草の採集も盛んであった。

大正9年(1920)10月1日、第1回の国勢調査が行われた。それによると、戸数544戸、人口男1,437人、女1,392人、合計2,829人である。

大正12年(1923)の耕地面積は、田128町7反9畝29歩、畑260町8反21歩である。これを明治11年(1878)の新検地面積と比べてみると、田8町歩、畑75町7反の増加である。大正5年(1916)、灌漑用池の増築や養蚕の普及によって桑畑の拡張が行われたためであろう。

道路状況については、大正8年(1919)県道路線を東へ改修し、大正12年4月1日郡制廃止施行により、郡道の約70%は県道となった。海岸線大崎より字若宮を経て根下県道に接続する路線は、この移管の中に含み、豊橋六連間県道となった。

大正5年電灯工事が始まり、8年には全村に電灯がともった。

耕地整理 老津村の中央部には、用水悪水路を兼ねた清水川が流れている。この川は蛇行している上に排水施設を欠いていた。そのため低地は雨のたびに沼のようになり、作付け不能の惨害を繰り返していた。また、灌漑用の溜池たらいけの構造も不完全で、漏水や土砂の流入が多く、干害をまぬがれることはできなかった。

道路も田原街道以外は、幅が狭く曲がりくねっていた。往来や肥料用の藻草を運搬するのもにも困難を感じていた。しかも一筆の平均は、田2畝歩、畑3畝歩と小さかった。

こうしたことから、全村あげでの耕地整理をし、土地の根本改良を図り、生産力の向上



老津耕地整理 現形図



老津耕地整理 確定図

を目指すことになった。

大正4年(1915)5月、耕地整理組合が設立され、老津村ほとんど全部と大崎村の一部にまたがる550町歩の耕地整理事業に着手した。

工事は昭和3年(1928)に完了した。総工費は305,891円を費やしている。

(5) 昭和(戦中・戦後)

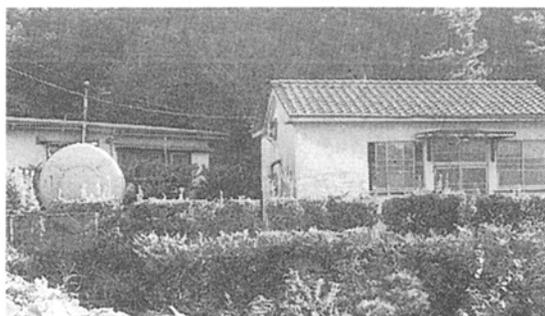
配給と供出 昭和13年(1938)国家総動員法により物資が統制され、配給制がしかれた。老津村でも供出が多く、米を作っている農家であっても米を食べることはあまりできなかった。「おいも様」のこぼに象徴されるように、日常の食は麦やいもであった。

戦争への協力として金属類の供出もあった。太平寺ほんしやうの梵鐘(江戸時代のもの)、森崎では仏壇の「チン」、向田では花火祭りに使う「薬研やげん」まで供出した。

簡易水道の敷設 昭和25年(1950)に老津に初めて簡易水道が引かれた。役場の井戸を水源として小中学校、家政学校、保育園、役場、農協に配管された。続いて27年には波入江に引かれた。一般家庭に簡易水道がとり入れられた最初であった。

昭和28年9月、13号台風により新田、多門田、森崎などの海岸地帯は、高潮の被害を受けた。井戸が汚染し、飲料水の確保に苦勞した。多門田、波入江、森崎、新田、中尾、中北、大津中の7字に「災害特別措置法」が適用され補助を受けることができた。そして、翌年5月「北部簡易水道」として竣工した。

昭和30年には南部地区(今下、岩塚、聖ヶ谷、向田、高縄代、新居、池上)も完成し、ここに全村に簡易水道が実現した。日常生活は便利になり、主婦の労力は軽減された。



南部簡易水道ポンプ小屋

(6) 新しい時代へ

老津村から豊橋市 戦後のインフレが進んでいく中で、農民の収入はこれに伴わなかった。工業生産物と農業生産物との価格の格差が大きくなって、農家の経済を苦しめていた。これは農業に主体を置く老津村の財政へも直結し、行政機能に支障をきたしてきた。高い税を負担しながら財政的には苦しく、事業も思うようにできなくなり、豊橋市との合併を望む声が強くなった。

豊橋市にも老津村との合併を積極的に進めたい理由があった。工業都市豊橋として飛躍するためには隣接町村の協力はもちろんのこと、広大な用地を必要としていた。とりわけ航空隊あとの工業誘致予定地100町歩のうち約40町歩が老津村に属していることは、豊橋市にとっては不便が多かった。

老津村・豊橋市両方のニーズが合致し、合併の動きが活発化した。そして昭和30年(1955)3月1日、豊橋市と合併した。

明治22年町村制公布以来60年余、先人の努力によって平和な村を築きあげてきた老津村も、新しいあゆみへ踏み出したのである。

三河港と漁業補償 昭和38年(1963)、三河港が重要港湾に指定されると、三河港づくりを中心とする臨海工業地域の計画が着々と進みだした。

港湾部分が埋め立てられると、老津漁業組合の許可漁場はすべて計画の中に含まれてい



漁業補償妥結調印式

るため、この計画が実現されると老津漁民は仕事を失うことになる。

老津漁業組合は海の権利を守るため、三河港造成反対期成同盟会に加入し、漁場の継続確保をはかろうとした。漁業交渉は難航したが昭和43年(1968)10月9日、愛知県庁において協定書に調印し漁業補償が締結した。県企業局からの補償提示金額は33億6370万円であった。

東三河食肉流通センター 昭和61年(1986)明海地区に東三河食肉流通センター建設が計画される。昭和62年老津、杉山、大崎校区は、建設位置の再考方の嘆願書を提出する。

以後反対同盟会結成、建設反対署名簿提出、住民反対集会、建設反対申立書の提出等々、長年にわたり反対運動を展開する。

しかし、平成5年3月東三河食肉流通センターは竣工し、4月より操業開始する。

公害対策、環境美化等周辺住民への配慮は最大限努めなければならない。

豊かな自然とうるおいのある老津 田原街道に沿って開けた老津は畑作、施設園芸を中心にした農業地域である。

紙田川、境川、汐川干潟など貴重な自然環境や豊かな緑に恵まれている。ゆるやかな丘陵地には、四季の花が季節を伝え豊橋の原風景が広がっている。

豊橋市都市計画マスタープランに示されているように、隣接する明海地区の臨海工業地域と生活(農業、居住)のバランスのとれた地域づくりが課題である。

広域物流の基盤となっている国道259号線や東三河臨海道路、国道23号線の引き込み線の整備促進を図るとともに、生活道路や農道の整備改善も課題である。今後も自然と共生する安全で住みよい環境づくりを進めるとともに、産業の振興に努めなければならない。

2 産業

(1) 農業

農家戸数の推移 海苔や魚介類など、海の資源に恵まれた昭和35年（1960）には、漁業との兼業が多く農家は490戸あった。漁業補償を受け入れた昭和43年（1968）頃からは専業農家が増加する一方、総農家数は減少している。平成元年に336戸であった農家数は、平成12年（2000）には268戸まで減っている。

これからの農業の課題は後継者問題である。昭和52年に発足した南部農業協同組合後継者部会（現在JA豊橋青年部会、31歳以下の就農者）の会員数の減少を見れば、老津も後継者問題が深刻である。一方、転職して農業を始める人がいるのは明るいニュースである。

JA豊橋青年部会 老津支部会員数

年度	S52	S62	H2	H12	H17
人数	55	60	49	39	19

作品目の多様化 昭和43年（1968）5月に完成した豊川用水事業により、老津の農業は大きく変わった。露地栽培では、それまで「さつまいも、麦、大根」などが中心であったが「すいか、メロン、キャベツ」の規模拡大が進んだ。

昭和55年（1980）頃からはブロッコリー、サニーレタスなどの洋菜が消費者の好みの変化とともに増えてきている。施設栽培でも豊川用水のおかげで自由な水やりができるようになり、暖房機の利用と合わせて様々な作物が栽培できるようになった。

昭和45年（1970）頃からは「なす、ししとう、抑制トマト」昭和50年頃からは「きゅうり、えんどう、いちご、ファーストトマト、アールスメロン」など、それぞれ作付面積の変化はあっても、園芸施設面積は確実に増加してきている。

現在では珍しくはないが、昭和50年代後半からは「ミニトマト、カーネーションなどの

切花、観葉植物、鉢花」を栽培する農家が多くなった。花類では「カーネーション、菊、デルフィニューム、バラ」が中心である。平成10年（1998）頃より盛んに使われだした西洋マルハナバチが「なす、トマト、ミニトマト」の人工受粉という重要な作業の代わりにしてくれるおかげで面積拡大ができるようになった。なすの販売高は、4億8500万円と老津の作物ではトップである。

2004年度 分類別取扱い高（JA豊橋老津支店）

分類	主な作物	金額	前年比
露地 (野菜)	キャベツ	3億8,600万円	増
	サニーレタス	3,080万円	減
	ブロッコリー	2,310万円	増
	他にセルリー、きゅうり等		
施設 (野菜)	なす	4億8,500万円	増
	ミニトマト	2億3,700万円	増
	トマト	1億4,500万円	増
	他におおば、温室メロン、えんどう等		
施設 (花卉)	カーネーション、菊、デルフィニューム、バラ、スイートピー等		

畜産 昭和20～30年代には、各農家で農耕用としての役肉牛の他に食料や副業的な鶏が飼育されていた。昭和40年代に入ると漁業ができなくなり、養豚、酪農、うずらを加え、専業畜産経営へ変化する。何れも順調な伸びを見せたが、昭和48年（1973）の石油ショック、昭和52年（1977）の石油パニックによる生産資材の値上がりと消費者の買い控えにより販売価格の下落が続き、畜産農家は大打撃を受けた。肥育牛においては素牛価格の安さを一つの機会ととらえ一層の規模拡大を計り危機を乗り切った。その後も、牛肉の自由化などを経営努力で克服してきたが、平成13年（2001）9月の「牛海綿状脳症（BSE）」国内初の確認により、かつてない厳しい状況が訪れた。

ホルスタインは一頭30万円～40万円で販売されていたが、最も安い時は、10万円を切るまで下がった。国の補助による全頭検査や

融資などが行われたが、以前の価格に戻るには2年以上かかる大変苦しい期間だった。

養豚では、平成に入ると公害問題が大きく取り上げられ、糞尿の処理をする浄化槽の設置に高額な予算がかかる事と後継者問題で養豚から離れる農家が相次ぎ、1戸に減ってしまった。

現在は、畜舎の整備と機械化が進み、専業でより大型化を目指す人、一方でキャベツなど露地野菜を栽培する兼業の畜産農家に分かれている。

老津の畜産頭羽数の変化（郷土誌老津、JA豊橋より）

畜種	S45	S60	H17
にわとり	10,000	3,400	0
ブロイラー	0	5,000	0
うずら	0	20万	34万
繁殖豚	0	450	60
肉豚	3,000	5,400	400
肉牛	700	1,600	2,100
乳牛	70	40	100

園芸施設の増加 南部農協20年史によると「昭和42年に老津にアングルハウス、パイプハウスが導入され、暖房機の普及と共にす、ピーマンの周年栽培が増加し、昭和46年頃の大形ビニールハウス普及率は高い」とある。

昭和47年（1972）頃には、聖ヶ谷でガラス温室が造られ始め、昭和49年（1974）に「豊聖温室園芸組合設立」と常に先がけた施設園芸を行ってきた。現在では、夏季に室温を下げる為、屋根の高いガラス温室やビニールハウスが建てられている。また、土を使わず、



聖ヶ谷 松井慎一氏コンピューター温室

水に肥料分を溶かす養液栽培や温度管理をコンピューターで行う農家も現れた。

進む機械化 稲作では、昭和36年（1961）頃に役牛に変わり耕運機が、昭和41年頃には田植機、バインダー、昭和60年（1985）頃にはコンバインが普及し始め、現在では大型化が進み、10aの稲田を10分～20分で刈り取ってしまう。畑作では、昭和45年頃から20～30馬力のトラクターが少しずつ普及し始めた。現在では、トラクターを2～3台所有する農家も珍しくない。

平成5年（1993）頃、キャベツ、ブロッコリーの全自動移植機が普及し、それまで10aあたり4人で1日かかっていたキャベツの移植が3時間で終わり、一戸の栽培面積が大きく伸びた。新しい機械の導入、そして大型化により、規模拡大も進んだが、非常に高価な機械もあり、農作物価格の低迷する中、経営状態が必ずしも良いわけではない。

機械の価格例（定価 JA豊橋 農機課）

- ・コンバイン 6条刈り 1,200万円
- ・トラクター 60馬力 670万円
- ・キャベツ移植機 120万円
- ・田植機 8条植 270万円

環境にやさしい農業 地球環境への関心が高まる中、農業の分野でも法律が変わり、様々な試みが行われる様になった。家畜糞堆肥が川や海へ流れないように平成16年に野積み禁止され、畜産農家は堆肥舎の設置が義務付けられた。牧草や家畜の堆肥を使い、化学肥



高縄代 松井健児氏温室

料を減らしたり、粘着テープ、防虫ネットを張って害虫を防ぎ、農薬の使用を減らしたりしている。

安心・安全な作物 多くの食品で、産地、原材料の偽装が発覚し、消費者の信用を失っている中、農作物も関係機関の指導のもとに信頼回復に努めている。

野菜では、使った肥料名、農薬名とその使用時期を記帳し管理している。畜産では、出生地、飼料、薬剤、流通ルートが携帯電話で見ることができるようになっている。平成15年には肥料、農薬の違法使用や販売の罰則が強化された。

豊橋農業協同組合老津支店 昭和23年(1948)、渥美地区管内の農協として老津村農業協同組合が発足した。昭和30年(1955)3月、町村合併により豊橋市に合併し、老津農業協同組合となる。昭和42(1967)年4月、豊橋市南部農業協同組合老津支所、平成9年(1997)豊橋農業協同組合老津支店となった。現在、大崎支店との統合の準備が進んでいる。



第三事業所のキャベツ出荷

土地改良と豊川用水 「土地改良」とは、灌排水・客土・区画整理・農道改修などによって土地の性質を改良することである。昭和24年(1949)に「土地改良法」が制定され、農業経営合理化のため、農地の改良・開発・保全・集団化を目的とした。この法律によって土地改良事業を行うことを目的とした公立組合を「土地改良区」という。

老津では、大正から昭和のはじめにかけて

耕地整理が行われた。当時は米が中心作物で、勾配があまりない土地を無理に田にしていた所も多かった。そのため、用水路が途中で切れて水が末端まで届かなかったり、水路が土砂で埋まって水があふれたりすることも多くなってきた。

昭和23年夏ごろ、農業危機回避と農業生産力増強の両面から経営の合理化問題が協議されはじめ、土地の交換分合の機運が高まった。この目的達成のためには「土地改良法」による区画整理の方が効果があると考えた。そして老津土地改良区は、本市の他の改良区に比べ先進的な区画整理を行ったところである。現在では豊川用水の維持、管理が大きな仕事となっている。

豊川用水事業は、豊川水系の水資源を利用して、東三河地方と静岡県湖西市を含む地域の総合的な開発を進めることが目的であった。農林省が昭和24年(1949)に水がめとなる宇連ダムの建設工事に着手し、昭和36年(1961)愛知用水公団が引き継ぎ、昭和43年5月に完成した。



豊川用水事業

今まで池や川の水を肥桶こまおけに汲んで、かついだり、牛車に積んで運んだりしていた田畑への灌水作業が豊川用水の完成により、ずいぶん楽になった。いつでも必要なだけ水の利用ができるようになったため、いろいろな作物の栽培が可能になり、施設園芸の拡大など、老津の農業の姿は大きく変化したのである。

(2) 商業・工業

商店の移り変わり 大正時代初期は、現在の岩塚が商店街であった。岩塚には、豊橋へ通じる主要道路（県道）が通り、沿道には現在にはない眼科医院や旅館があった。今の岩塚集会所には中西製糸工場があった。

大正8年（1919）に新しい県道（現在の国道259号線）ができ、大正13年（1924）に渥



美線がひかれた。そのため、人の流れが変わり、店はやめたり、他へ移転していったりして数は減っていった。

昭和初期になると商店は根下通りに集まり、老津村民の生活に必要なものはそろっていて、新田、高縄代、新居など店のない地区の人々も利用していた。しかし、多くの家では米、野菜などは家で作り、着るものも自分たちで仕立てていたので、通りは賑わっていたとは言えなかったのである。

当時は、今はない店として桶屋が3軒、かご屋が2軒、ちょうちん屋が2軒あった。菓子屋は3軒あり、駄菓子やまんじゅうの製造、販売をしていた。できあがった菓子やまんじゅうは、杉山、伊古部、大崎、野依などのほか赤羽根、渥美方面まで配達していた。この他にも味噌・醤油や酒の製造、販売をしていた店があり、近隣地域の人々が多く利用していた。

戦後も、老津は商業の中心地として活気があった。米やうどん粉が自由に入るようになり、米屋やうどん屋ができ、配達もされた

のである。野菜や味噌・醤油、菓子や履物などの日用品が多く販売されたが、ハム、ソーセージなどの加工食品、化学調味料は無く、乾物や缶詰が少しあった程度である。

現在の商店は、時代の流れの中で、人々の生活様式の変化や世代の交代のためにやめてしまった店が多く、昔の活気はなくなってきている。

地域に密着し、何十年も続いた老津の商店も利用する人が年々減ってきている。近くに大型のスーパー店が出現し、マイカーの普及による人々の行動地域が拡大したためである。

昔からの商店のようすを比べてみると次のようになる。

商店の種類	昭和3	昭和30	平成元	平成17
菓子製造販売	1	5	3	1
食料品(青果・鮮魚)	3	8	4	5
飲食	10	3	9	8
米穀	6	2	2	1
酒・調味料等	6	3	4	
雑貨(コンビニ)	13	8		3
呉服・寝具・衣料品	7	4	3	2
靴・履物	2	1	1	1
薬品・化粧品	2	2	4	3
自転車修理販売	3	3	1	
時計・写真		1	1	1
文具・書籍		1	1	1
農機具・機械器具		1	4	6
燃料			2	1
仲買	6			
かご製造・販売	3			
理容・美容		3	6	6
花卉の仕入れ販売				1
クリーニング		2	2	2
合計	62	47	47	42

工場の変遷 昔から老津には大規模な工場はなく、日常の生活に必要なものを作って販売する家内工業的なものが多かった。味噌・醤油、酒類の醸造のほかに菓子、麺類、豆腐、下駄製造などである。

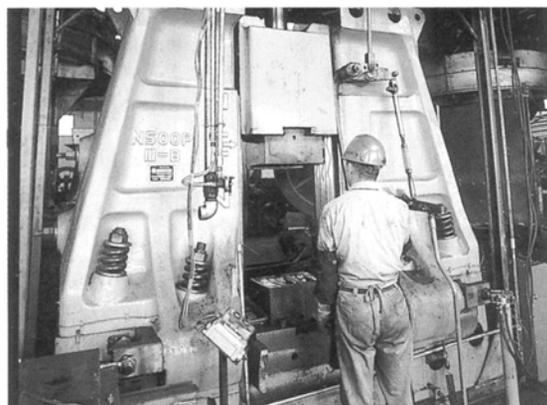
農業中心の地域であるため、鍛冶屋、製糸・

織物工場、でんぷん工場、製茶工場もあった。漁業に関するものでは船大工があった。

これらの工場は、昭和30年代まで続いたが、その後、日本の高度経済成長や社会の大きな変化とともに姿を消していったのである。

鈴木新兵衛商店（酒造業） 安政元年（1854）より昭和57年（1982）まで5代、124年続いた。最盛期は大正から昭和の初めで、杜氏は10人ほどいた。銘柄は「花衣」「鷹の山」「時津風正宗」「白菱正常」であった。地元はもとより渥美、豊橋、新城、三河大野と東三河全域にわたり出荷していた。工場があったところは現在、老津公園になっている。

豊田鉄工場「円次郎鍛冶屋」と親しみをもって呼ばれ、農具、漁具を中心に製造してきた。昭和8年（1933）に合資会社となり、架線吊金具、高圧碍子金具を製造し多角経営を始めた。戦後は、オートバイ部品を扱うようになり、現在は鍛造が中心で、自動車関係の部品などを製造している。



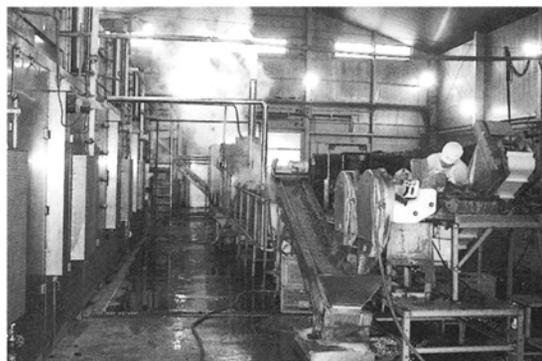
エアドロップハンマー

三共食品 昭和39年（1964）にブドウ糖や水あめ等に使用される酵素を扱う専門職の技術を生かして、現社長の中村俊策さんが始めた。

昭和50年（1975）に現在地に乾燥野菜、天然調味料エキスの製造工場を建設し生産を開始した。インスタント食品業界の隆盛と共に歩んできた同社は、天然調味料・インスタントラーメンやカップ焼きそばなどに入ってい

る乾燥野菜（キャベツ、ニンジン、ほうれん草、白菜など）・乾燥食品（シソ、しいたけ、タラコ、エビなど）の三本柱を商品として成長してきた。この急成長は技術、開発力と東三河地域が豊富な野菜や養鶏の盛んな土地で、原材料を仕入れる上で有利であったからである。

従業員数は85人（男60人、女25人）で老津からは6人が勤務している。



工場内の作業

ファインモールド 昭和62年（1987）に創業、平成8年（1996）に老津町字的場に自社工場を設立した、プラスチック組立て模型（プラモデル）を製造する会社である。宮崎駿監督のアニメ映画「紅の豚」の水陸戦闘機のプラモデルが評判となり、平成13年には900個の部品からなる宇宙船「スターウォーズ」のプラモデル化により世界的に有名になった。

社長の鈴木邦弘さんは「本物とそっくりに作ることにこだわり、大きな会社で出来ないことをやっています。社員はたったの5人ですが、消費者に夢と喜びを与える仕事をしています」と話されている。



スターウォーズの製品

3 校区の活動

老津町総代会は、昭和30年（1955）に豊橋市への合併を機に町政の発展や住みよい町づくりのため、自治組織として設置された。

(1) 総代会の組織と校区費

組織 総代会は、平成11年度まで、各字から選出された町総代13名と総代会長で構成され、町総代が会計および各委員会に分かれ、それぞれ、市の行政に対応した仕事をしたり、校区内の事業の取りまとめをしたりしてきた。

その後、平成12年度より老津校区を4つの区に分け、各区から選出された町総代4名（昼間にも勤務し、全体的な問題処理）を新たに配備した。そして、各字から選出された字総代13名（主として広報の配布や実働的な業務を受け持つ）および町総代の互選によって選ばれた総代会長の17名で構成されている。

さらに、総代会には、各字から選出され、組織された女性部（15名程度）があり、盆踊りや敬老会、運動会、公民館の掃除等、校区の行事で大活躍している。

松橋正明総代会長時に、従来の総代会組織を改革し、より円滑に活動が進められるように配慮した結果である。



土木補修申請箇所の視察（総代会、土地改良等関係者）

総代会には独自の活動のほかに社会教育委員会、防犯協会、交通安全推進委員会、葬具

〔総代会の組織と現況 戸数は H.18.4. 現在〕

	区	字 総 代	戸 数
総 代	1 区 町 総 代	波 入 江	51
		中 尾	81
		中北・大津中	31・38
代	2 区 町 総 代	森 崎	86
		多 門 田	45
		岩 塚	74
会	3 区 町 総 代	今 下	123
		池上・池上住宅	68・86
		聖ヶ谷	93
長	4 区 町 総 代	向 田	75
		高 縄 代	59
		新 居 ・ 新 田	45・27

委員会、土木委員会、市民館運営委員会、体育委員会、子ども見まもり隊実行委員会、老津児童クラブ運営委員会などがあり、校区の事業、運営に機能している。体育指導員、青少年指導員、清掃指導委員も活躍している。
校区費 校区費は、毎年各家庭から集められる。以前は点数制であったが、昭和55年度より均等割になった。平成17年度は、1戸あたり10,000円(家庭の事情により減額また免除)集められ、各種事業や社会福祉、各種団体の活動等に使われている。

(2) 総代会の活動

総代会の主な会議

会議名	出席者	時期
企画会議	総代会長、町総代、字総代表（字長）	毎週火曜日
定例会議	総代会長、町総代、字総代	毎月中旬
総代会議	総代会長、町総代、字総代	毎月下旬

主な協議事項は、土木補修箇所の検討及び市担当課への依頼、盆踊りや敬老会、校区運動会や成人式の企画などの他、献血、市傷害保険事務、ゴミステーションの管理等である。

(3) 校区の行事

総代会は、保護司および更生保護女性会、民生委員、小・中学校およびPTA、喜楽会連合会、消防団、青年有志と連携して多くの行事を企画し運営している。

① 主な行事

盆踊り大会 毎年8月に小学校の運動場でこども達や校区民、校区各種団体の方々の参加を得て、盛大に開催されている。

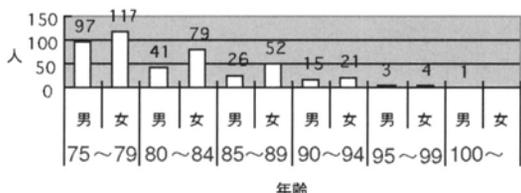
平成17年度は、青年有志や小学生8名の太鼓に合わせ、ドラエモン音頭、ジンギスカン、豊橋トントン歌などの曲によって盛大に開催された。大会後、恒例の抽選会に、たくさんの景品が用意され、大変好評であった。



小学校校庭で開催された盆踊り

敬老会 老津校区では、今まで苦勞をされて豊かな社会を築きあげてこられた方々を敬い、感謝の気持ちをこめて毎年9月の第3日曜日に「敬老会」を開催している。

平成17年度 老津校区敬老者数(456名)



平成17年度は456名の75歳以上の方を招待し、老津町公民館で行った。

毎年、愛好会の方々の協力を得て、カラオケ、民謡、詩舞などを鑑賞して楽しいひと時を過ごしていただいた。いつまでも元気でられることを願っている。

運動会 昔から「老津の花火祭り」は有名であった。各字が競って花火を打ち上げ「海上から見物する」という特色があった。昭和42年(1967)まで続いた花火祭りも打ち上げる場所も無く、時代とともにその姿を消したのである。

これに代わって始まったのが「運動会」である。



校区運動会年齢別リレー

各字対抗の競技は毎年盛り上がり、校区民の楽しみの行事となった。特に「綱引き」と「年齢別リレー」は人気があり、全員総立ちで自分の字の選手を応援するのである。

平成17年度から「がんばれ50代」という種目を加え、各年齢層からの出場を充実させた。60歳以上は「玉いれ」に参加するが、50歳代の参加種目が無かったからである。年齢別リレーでは、成人女性が参加し、小学生から40歳代までのリレーが展開された。

運動会の運営は、校区総代会が行っているが、体育委員の活躍もめざましいものがある。準備から当日の運営まで何回も会合をもって、綿密な計画のもとに実施している。

平成17年度運動会の結果

種 目	1 位	2 位	3 位
ジャンボ縄跳び	聖ヶ谷	高縄代	中 尾
虹のかけ橋	向 田	聖ヶ谷	岩 塚
綱 引 き	中 尾	多門田	森・今
年齢別リレー	波入江	中 尾	岩 塚
4区2人3脚	2 区	4 区	3 区
4区がんばれ50代	4 区	3 区	1 区

総合結果	優 勝	2 位	3 位
字 名	聖ヶ谷	中 尾	向 田
得 点	37点	36点	31点

文化祭・市民館芸能まつり 老津は、体育的行事ばかりでなく、文化的行事も盛んである。

毎年、10月末から11月はじめのころの日曜日に「市民館芸能祭り」とともに「校区文化祭」を校区市民館と老津町公民館で開催している。

校区市民館を利用している方々の発表の場でもあり、小学校の児童はじめ、大勢の校区民の参加を得て実施されている。



文化祭でのバザー

平成17年度は「大正琴、カラオケ、民謡、詩吟、詩舞」などが校区市民館で演じられ、小学校児童の作品をはじめ、絵手紙、絵画、写真、ちぎり絵、書、生け花、小物、盆栽、手芸品などが公民館に展示された。

バザーも実施され、駄菓子のお店や金魚すくい等、子どもたちに大人気であった。



文化祭 作品展

成人式 老津校区では、例年1月の第2日曜日に成人式を行っている。年々成人者の人数が減っているが、頼もしい老津の若者の成人を祝い、将来の社会での活躍を期待して盛大に実施している。

慰霊祭 毎年9月に太平寺において、3月に老津神社において、戦没者の慰霊祭を行っている。

② 豊橋市制100周年記念行事

校区史の編集 豊橋市総代会では、豊橋市制100周年を記念して校区史の編纂を進めた。老津校区総代会では、平成2年3月に発行された『郷土誌老津』を要約、加筆し、約50ページの老津編を編集委員10名で作成した。「手にとって読みやすいもの」をめざして編集にあたり、老津の歴史と今の姿、これからの夢を掲載している。

地域イベントの開催 豊橋市制施行100周年を記念して、地域でも盛り上げるために各種のイベントを開催した。

老津校区としては、今まで続けられて校区民に親しまれている行事を見直し、より一層充実させ、創意に富んだ催しを計画し実施した。盆踊りと文化祭を盛大に行った。

③ 防災訓練

老津校区では、平成18年に防災規定を策定し、防災訓練を実施した。予想される東海・東南海地震に備え、大災害に対応する住民の強い団結と協力が必要である。

防災活動の重点

- ・情報収集と避難誘導の系統化
- ・救援体勢の確立と避難場所の設置、特に弱小者の保護
- ・救護施設と人材の確保
- ・食材と調理施設の確保
- ・長期避難生活への対応

④ その他の活動

環境整備 老津町は農業中心の地域である。特にビニールハウスが林立している所での排水施設や路肩整備、用水や池など、補修箇所は数限りなくある。

毎年8月に町内の補修箇所の申請を受けつけ、総て市役所の担当課へ依頼している。危険箇所等、緊急性のある箇所から工事を進めている。

道路整備 現在、老津町内の道路事情は極めて深刻な状況である。通勤時の国道259号線及びバイパス周辺、今下信号付近など、老津町全域で交通渋滞となっている。

その解消のために、国道259号線バイパス工事、続いて高縄代から多門田へ通ずる県道城下線、大清水から老津南部を通る大清水線と大型の工事が予定されている。

校区子ども見まもり隊 時代の変化とともに犯罪も悪質化し、人の命をあまりにも軽く見る傾向が顕著である。子どもを取り巻く環境も極めて深刻な状況で、学校や塾で殺人事件が発生する世の中では、安心して暮らせる場所がなくなってきている。

老津校区では、小学校のPTAを中心にして「校区子ども見まもり隊」を結成した。大勢の目で地域の子どもたちを守るためである。

秋祭り(笹踊り) 毎年、10月の第1土曜日に「老津神社例大祭(秋祭り)」が実施されている。老津神社には15の神が祭られており、市内でも由緒あるお宮である。例大祭は、神事に続いて「巫女の舞」「笹踊り」が奉納され、

みこしが今下交差点まで練り出されるのである。また、「子どもみこし」が字の主要道路を練り歩く姿も見られるようになった。



老津神社例大祭 奉納「笹踊り」

この他に、老津神社の行事には、12月1日に新嘗祭、12月31日に大祓祭、除夜祭、1月1日に歳旦祭、2月3日には節分祭、3月1日に祈年祭、毎月15日に月次祭が行われている。

(4) 校区内団体の歴史と活動

老津校区婦人会 婦人会は、昭和12年(1937)に「大日本国防婦人会老津分会」が設立されてから始まった。

昭和30年(1955)町村合併により「老津校区婦人会」と改称されてから、平成7年に解散するまで40年におよぶ長期にわたり活動をしてきた。

会員の研究会、講習会、奉仕活動等、独自の活動を進め、他にも校区の各種団体と協力して町民のために多くの事業を行ってきた。主なものは、盆踊り、敬老会、体育大会等で、その他の活動として「花嫁衣装の貸し出し」「夏休み農協子供教室」「各字での手作り教室」を行った。

婦人会の活動は、夜の集まりが多く、役員は家事や育児との両立が大変で、平成5年度末をもって、その活動を終えることになったのである。

現在は、総代会女性部が活動の一部を引き継ぎ、校区民のために貢献している。

老津喜楽会連合会 老人福祉法が制定された昭和38年(1963)10月に第1から第4の4ブロック連合で「老津喜楽会連合会」が結成された。当時の会員数は330名で、同年『豊橋市老人クラブ連合会』に加入した。

昭和53年(1978)に、第5・第6喜楽会が、翌年に第7・第8喜楽会が結成され、8ブロックの連合会となった。

喜楽会は、65歳以上の町内在住者で組織され、平成17年度の会員数は496名である。

組織	字	会員数
第1	波入江、中北	60
第2	中尾	53
第3	森崎	78
第4	岩塚、大津中	56
第5	聖ヶ谷	59
第6	今下、新田	73
第7	向田、池上	64
第8	高縄代、新居	53

喜楽会の活動は、5月の福祉大会、小学校での大津集会、年6回実施される研修旅行を実施している。

会員の活動としては、趣味の教室(俳句、詩吟、書道、民謡、カラオケ、ゲートボール、グランドゴルフ、ペタンク、短歌、フォークダンス、絵手紙)があり、市の大会や東三河の大会に出場したり、作品展に出品したりしている。

奉仕活動としては、保育園の環境整備や年間を通しての小中学生の交通安全指導や見守り活動、老津公園や老津神社の清掃、寝たきり老人の友愛訪問等、多くの場で社会貢献をしている。高齢化社会の進む中で生きがいを見つけ、ますます元気に活躍している。

老津校区青年団 老津校区青年団は、明治38年「老津青年会」として結成され、昭和2年には「老津女子青年会」が加わり、戦後も活動を継続してきた。昭和30年町村合併により「老津校区青年団」となり、平成7年廃止さ

れるまで積極的に活動を続けてきた。

団員は、老津在住の24歳までの男性と22歳までの女性であった。総務、体育、文化、産業、厚生各部に分かれ、視察や研修、レクリエーション、奉仕活動などを行い、自主的な運営に努力してきた。

最近、青年団活動再開の動きがある。新しい形での再開が望まれる。

豊橋市消防団第五方面隊老津分団 老津消防団は、明治20年(1887)に組織されてから、昭和13年(1938)に「公設老津消防組」として結成された。昭和30年町村合併により「老津消防団」と改称され、昭和41年(1966)の方面隊組織化により「豊橋市消防団第五方面隊老津分団」となった。

第五方面隊老津分団は、老津消防団の伝統を受け継ぎ、防火防災活動はもとより、盆踊り、運動会、祭礼の警備に至るまで、町民の安全を守り活躍している。



平成17年度第五方面隊放水競技大会

おなじみの「こちらは老津消防団です。お休みになる前に、今一度火の元をお確かめください。」という呼びかけのとおり、啓もう活動にも力を入れ、町民の防火、防災意識の高揚に努めている。「消防団のおかげで安心して暮らせる。ありがたいことだ。」と町民からの信頼は極めて厚い。

(5) 公共施設

老津町公民館 公民館は、老津町字岩塚118番地にあり、校区のほぼ中心に位置している。

老津町が豊橋市に合併した昭和30年(1955)3月1日以前は、村役場、村会議事堂があり、村の行政を行う場であった。合併とともに豊橋市役所老津支所となり、昭和57年(1982)5月に大清水窓口センターが開設されるまで業務が行われていた。

現在の公民館は、昭和44年(1969)11月、総工費4,530万円をかけて、校区民の福祉向上、組織運営の近代化をめざして建設された。

1階には、老津校区総代会、南部土地改良区、老津喜楽会連合会などの事務所があり、2階には、大ホールや和室があり、集会やレクリエーション活動の拠点となっている。



老津町公民館

民族資料館 資料館は老津神社の境内にあり、元村役場の庁舎を、昭和44年に現在の公民館建設に伴い移転、建築したものである。

約100㎡の館内におよそ1,000点の民族資料や生活必需品、農耕、養蚕、漁業器具などが保存されている。昭和44年(1969)の漁業補償により、家を新築する人々から寄贈されたものである。「消えゆく郷土資料を教育に役立てよう」と保存、管理をするために設置されたのである。

集会所 町内の各字には「集会所」または「公民館」がある。各字の人々が会合に使用し、近隣の人との懇親の場ともなっている。

現在ある集会所は、多くが昭和44年～45年頃建てられたもので、おおよそ35年以上経っているものが多い。

老津校区市民館 校区市民館は、老津小学校の敷地内にあり、昭和57年(1982)に総工費8,052万円をかけて建設された。

校区の人々が自主的に利用する施設で、主に集会に利用され、趣味の会の練習や発表の場として活用されている。

1階には、図書談話室、和室、実習室があり、2階には、集会室、児童室兼研修室、小会議室があり、冷暖房が完備している。

校区市民館は、災害が発生した時の第1指定避難所になっており、防災の拠点としての機能を備えている。

老津公園 今下地内にあり、国道259号線に面している。約150年続いた造り酒屋、鈴木新兵衛商店の工場があったところである。

昭和56年(1981)に事業をやめるに当たって3,541㎡の土地を豊橋市に寄贈したのである。

豊橋市では竹林と併せて公園を造り、総事業費1億2,700万円をかけて昭和61年に完成した。緑いっぱいのすばらしい公園である。

嵩山池周辺公園 老津町池上地内に嵩山池がある。嵩山池は本来、田畑の灌漑用の池として利用され、農業の振興に大きな役割を果たしてきた。現在は、豊川用水の普及により、その役割は減少しているが、自然環境の保護、人々の憩いの場所として、その姿を変えようとしている。愛知県の環境整備事業の一つとして、池とその周辺を公園化し、新装なった市営池上住宅とともに姿を変えようとしている。訪れた人々の「やすらぎの場」として機能することとなるのである。



嵩山池

第3章 教育と文化

1 学校教育・保育

(1) 老津小学校

① 明治前期の教育

小学校のはじまり 教育制度のできる前の庶民は、寺子屋や私塾で学んだ。明治維新以降は、これらが統廃合されてきょうこう 郷校・ぎこう 義校となっていた。

明治5年(1872)8月の学制発布により、老津の太平寺(彦坂南岳)、桂昌寺(園部雪仙)、大雲寺(福本宗得)の住職3人が小学校世話方となった。明治6年10月6日桂昌寺本堂を仮校舎として十五番小学校が設立された。開校当時、生徒は55名で寺子屋式の座机で勉強した。学齢は6歳から13歳までの8か年で文部省検定の教科書により修身を中心として教育が行われた。

- ・明治9年(1876)十五番小学老津学校
- ・同年9月第三十六番第三十七番小学老津学校に校名が変更
- ・明治13年(1880)教育令改正で国家統制が強化
- 公立第二十八番老津学校と校名が変更



現在の桂昌寺本堂

明治15年(1882)には学業試験が定められ、毎月の小試験と半年ごとの中試験が行われ、その結果、進級が許された。そして大試験に合格すると下等から上等へ進むことができた。この頃、公立二十三区老津学校の新校舎が竣工した。

② 明治後期の教育

明治22年(1889)に帝国憲法が発布され、23年には教育勅語が出された。教育勅語の理念と精神は半世紀にわたる教育の基本となった。御真影(天皇の写真)が奉安殿に置かれ、教師も児童も毎日これに拝礼した。

老津尋常高等小学校 明治25年高等科が併設され、校名が老津尋常高等小学校となった。この頃の教育は修身・読み方・習字・綴方・算数・唱歌・図工だった。

③ 明治末期の学校生活

子どもたちの生活はおおらかで、学校から兎狩りをしたり、伊古部の浜にくじらを見に行ったりした。遠足には、焼いたにぎり飯を持って岩屋山や城下の海岸へよく行った。

④ 大正から昭和への教育

大正の頃の学校生活 ヨーロッパでの児童中心主義の教育の影響を受けて自由主義的な新教育運動が起こってきた。全人教育が叫ばれ、教師と児童の接触を大切に考え、夏休みなどに臨海学校が盛んに行われた。その中で御召列車の出迎えやちょうちん行列に参加するなど、皇室行事が学校生活の中にも強く結びつけられた。

この頃の教師は、つめえりの服を着て愛の記章をつけていた。5年生以上は、はかま



大正時代の1年生 女子組

を着用し、女子はおさげ髪でちょう結びをしていた。

明治30年(1897)から大正14年(1925)まで、校長として尽くされた彦坂利作先生は、村人たちから「神様の次に偉いのは利作校長である」と言われるほどの人格者であった。

水泳訓練 スポーツも次第に盛んになり、庭球・野球・バレーボール・すもうなど厳しい練習が行われた。この頃、応援歌や校歌も作られた。また、多門田・新田あたりの海で水泳訓練も始められ、遠泳には「ヨイコラ ヨイコラ」のかけ声とともに打つ太鼓の音を聞きながら泳いだ。2時間泳いだ者は黒、次の者は緑、石臼組いしうすぐみ(泳げない者)は赤の布を帽子につけた。

その頃の海は、水もきれいであったそうだ。

水泳訓練は、昭和になっても盛んであった。

⑤ 日中戦争前後の教育

大陸進出の国策は、教育を国家主義戦時教育へと追い込むことになった。子どもたちは、学校で慰問文(戦地へ赴く兵士への手紙)を書いたり、慰問袋を作ったりした。

カウクン (校訓)	チユウカウダイイチノコト
マジメデアレ	タエズハゲメ
ナサケブカクセヨ	コラヘジヨウヨクセヨ
ジブンノコトハジブンデ	セヨ
イツモニッポンジンタルコ	トヲワスルナ

昭和8年(1933)に国定教科書が改訂され、1年生の国語の教科書は「サイタ サイタ」という色刷りの本となった。

昭和15年(1940)、全国で紀元二千六百年を記念する行事が行われたが、日華事変の最中で「ぜいたくは敵だ」のスローガンのもと、国民に耐乏生活が要求された。また、天皇を神として敬うことを教えられた。

老津国民学校 昭和16年、国民学校令が發布され、教育は完全に戦時体制の中に組み入れられ、体育、徳育に重点が切り替えられた。

戦時中の学校生活 昭和16年12月8日の太平

老津校校歌

作詞 大林猛雄
作曲 伴 延二

一 かげろうもゆる 半島の
桜咲きそう わが庭に
五百有余のはらからは
希望の光 かがやきて
みのらん時ぞ ほこるなれ
いざやはげまん

二 みどりしたたる わが庭に
染しきあせの労働は
老津健児の常のわざ
心をあわせ もろともに
土地の美德 ほこるなれ
いざやはげまん

三 るりのみ空に 雲はれて
心は清し はてもなし
校風ゆかしわが庭に
やかたつどいて もろともに
まことの道を ほこるなれ
いざやつくさん

四 吹く風いかに 強くとも
我等の学ぶ 老津校
慈愛の父母のみ教えを
かたく守りて もろともに
にしきのあやを ほこるなれ
いざや進まん
いざやいざ

多門田海岸での水泳訓練

洋戦争勃発は、日本国内を戦争一色に塗りつぶした。戦争が激しくなると勤労学習の名目で運動場を掘り起こし、さつまいもやヒマの栽培をしたり、いなご取りをしたりした。

戦争末期には、空襲が多くなり、田原しょういだんに焼夷弾が落とされたり、渥美線の電車や村内の人々が機銃で撃たれたりした。当時の学校日誌には「空襲警報の発令のため授業中止」と毎日のように書かれている。

⑥ 戦後の教育

民主主義教育のはじまり 昭和20年(1945)8月15日ポツダム宣言を受諾し、長かった戦争が終わり、個人の自由と基本的人権の確立を柱とした民主主義教育が始まった。御真影が奉還されて、奉安殿は取り壊された。

幸いにも災害をまぬがれた老津へ疎開して来た児童で、昭和21年には16学級(児童数760人)になった。老津小学校では、この年が最大の児童数であった。

⑦ 昭和後期から平成への教育

新しい校歌の誕生 昭和41年(1966)、高須三夫校長は「歴史のある老津にふさわしい校

歌を」と気持ちをこめて作詞された。在職していた牧野寿一教諭により歌いやすく、末永く歌いつがれる曲が作曲された。

FBC花壇受賞 校庭の片隅で作っていた学級花壇が年々盛んになり、各通学団ごとに字花壇を設け、地域ぐるみの花いっぱい運動に発展した。昭和47年からは、植樹や芝生の植え付け、花壇や池の造成が行われた。PTA・総代会など地域の全面的な協力によるものが大きかった。



FBCメイン花壇

昭和51年(1976)には、以前から「花に培う 優しい心」「花に学ぶ 明るい心」「花に育つ 美しい心」を合言葉に手がけてきた花いっぱい運動の成果が認められ「花壇FBC農林大臣賞」「県知事賞」など、コンクールで連続受賞した。また、昭和53年度には「花壇FBC名誉大賞」をも受賞した。昭和30年から53年まで用務員を勤めた松井小光さんは「種井武朗先生を中心に毎年きれいな花を咲かせたことを思い出します」と話された。
大津集会 昭和53年度より、日ごろお世話になっている校区の方々、家の人に感謝するという目的で大津集会がスタートした。老津喜楽会の方々との交流や「力いっぱい努力したこと」の発表などと少しずつ内容は変わってきた。先人の知恵を学ぶ集会として意義ある

老津小学校の歌
作詞 高須三夫
作曲 牧野寿一

朝日 かがやく 赤石の
峰は はるかに きり晴れて
みのり ゆたかな 老津原
見わたす 丘に ならび立つ
わが学び舎に 光あれ

夕日 あかねに 映ゆる海
潮の めぐみを たへえつゝ
明るく ほおを よせあつて
仲よく はげみ 育ちゆく
わが学び舎に 榮あれ

港 おおつの むかしより
ひらき 伝えし はらからの
かがやく 文化 うけつぎて
希望の はなを さかせゆく
わが学び舎に 榮あれ

♩=112 明5C 高須三夫作詞 牧野壽一作曲

老津小学校校歌

会となっている。

単独調理校廃止 給食が開始されてから昭和61年度まで単独調理校であったが、昭和62年度からは給食センターで一括して作られた給食がコンテナで運ばれて来るようになった。

郷土誌「老津」の編集 平成になって、鈴木岩男校長はじめ職員19名と児童292名（男子141名、女子151名）11学級で「郷土誌老津」の発行に取り組んだ。

老津小学校の2学期制 豊橋市教育委員会は、市内全小中学校で平成19年度より2学期制への移行を実施する。老津小学校では18年度より準備を進め、実質的試行に入る。

ア 基本的なスタンス

- ・教育改革につながる
- ・三学期制の長所を維持する
- ・二学期制の短所に対応する

イ 具体的にどう変わるか

- ・通知表は年間3回（夏休み前、冬休み前、年度末）
- ・各期末にポートフォリオ（成績関連資料）
- ・長期休業期間は同じ、秋休みは新設せず
- ・始業式は4月に、終業式（修了式）は年度末
- ・保護者会を夏休みに実施
- ・自作教材の開発、カリキュラムは変更なし
- ・17年度改革の継続（総合、授業コマ、群読等）

(2) 農業補習学校・青年学校

① 農業補習学校

明治38年（1905）6月2日老津尋常高等小学校に付設し、老津村立農業補習学校として同年7月1日に開校された。入学の資格は14歳以上で、高等小学校2か年の課程を卒業した者、またはこれと同等の学力を持つものとされていた。

女子部の設置 大正6年（1917）4月、学制を変更し本科1・2年、別科、練成科に分けられ女子部が設置された。女子の別科は12

年度	入学	1年生	2年生	計	卒業人員
明38	30	30		30	
39	24	17	5	22	5
40	32	26	6	32	6
41	20	20	11	31	11
42	16	16	5	21	5
43	26	26	4	30	4
44	14	13	11	24	11
大1	7	5	1	6	1
2	10	8	0	8	0
3	13	13	4	17	4
4	13	13	4	17	4
5	27	26	5	31	4

農業補習学校入学者・生徒数・卒業者数

歳以上で小学校就学義務のない者に限られていた。

少ない卒業者 年度別の卒業者を見ると、入学時に比べて大変少なく、途中退学者が多かったことがわかる。

当時の農業経営の中では、働き手が不足で余儀なく退学した生徒も多かった。父親の出征などの家庭では、なおさらのことであった。

昭和5年度卒業の高柳正一さんは「作業が多かった。農園は今の中学校の下方にあって、主に麦・さつまいもを作り、豚も飼っていた。馬もいたが、戦争から帰ってきた馬なので、片目はつぶれていた。乗馬や世話もした」と話された。

② 青年学校

校名の改称 昭和10年（1935）7月1日、農業補習学校は、青年訓練所に統合され、愛知県渥美郡老津村立青年学校として誕生した。

本科一部・二部、研究科および季節的なものと区別された

国民学校との併設 昭和15年（1940）まで渥美郡老津尋常高等小学校との併設が、太平洋戦争へ突入するとともに、老津国民学校との併設となった。

社会情勢が戦争に傾いていくにつれ、教科および農業、裁縫の他に教練も開始された。



当時使用された剣道防具

青年学校の独立 昭和19年（1944）、老津国民学校と併設されていた青年学校が独立校となった。この年から、特に食糧としてのさつまいもの大增産と陸海軍部隊の指導による実践訓練・戦闘訓練が行われた。

戦後の学校生活 昭和20年（1945）8月15日の終戦を迎え、独立校舎で学校の設備充実と食糧増産に力が注がれた。

新田の林久夫さん、中北の中木辰巳さんは当時を思い出し「勉強もせず、芋、麦づくりの作業ばかりだった。家で仕事をして、途中で学校へ行っても先生には叱られず『ご苦労さま』と言っただけだった」と話され、先生方は、遅れてきたことを責めることなく温かく見守ってくださったそうだ。

また、多門田の松井昭さんは、その頃を思い出し「楽しいはずの少年時代、食糧難で本当に苦しい時代でした。戦争は、絶対二度とあってはいけない。今はただ平和を祈るのみです」と、しみじみ話された。

老津村立青年学校は、昭和21年度末の六・三制発足までで廃止となった。

(3) 章南中学校

① 村立老津中学校

新制中学校 昭和22年（1947）3月、学校教育法が公布され、学制も六・三制になり、新制中学校が誕生した。老津は当時、村長であった高柳四一氏を中心に設立し、校舎は老津小学校の一部を間借りし、設備備品は青年学校のものを継承して4月に開校された。

新校舎建設の願い 新制中学が発足したが、施設設備は不十分だった。とりあえず教室を増やすため、昭和23年に旧老津演習兵舎を移築したが、それは粗末な校舎であった。

こうした実情に対応して、昭和24年新校舎を建築することになった。当時の工事は、村の人、生徒たちも総動員して進められた。

僕達は一日に3時間も木材運びをした。時々は半日中作業を、多い時には一日中作業をした。かわら運びもした。（後略）、

2年 関 哲夫 昭和24年 老津新聞

こうして昭和24年（1949）9月、新校舎落成の日を迎えたのである。



昭和28年頃の村立老津中学校校舎

② 豊橋市立老津中学校

豊橋市へ合併 昭和30年（1955）3月、豊橋市への合併にともない豊橋市立老津中学校に改称された。

統廃合 昭和34年4月、杉山小学校校長土井二郎氏を校長に迎え、同年11月、両校区の代表により老津中・杉山中統合協議会が組織された。当時学校の統合を進めるにあたり、校区民が対立しあって、目的を達せられない事例が数々あった。それで、老津・杉山両校の統一も慎重におこなわれた。

校名章南 昭和35年（1960）2月、新しい校名の候補が協議された。老津校区からは「興南」「祥南」「興和」、杉山校区からは「豊橋」「豊陽」などの候補が出された。そして協議の末

「興南」「豊橋」の2案が選ばれ、市長にも選択してもらった。

最終的に「章南」と決定した。章は彰と同義で「あらわす」「あきらかにする」の意味を表している。(豊橋市立老津中学校沿革史より) 昭和35年3月26日老津中学校閉校式が行われ、13年の歴史を閉じた。

③ 豊橋市立章南中学校

章南精神の誕生 昭和35年(1960)4月3日、両校の円満な統合を果たし、豊橋市立章南中学校が開校された。生徒数509人、職員数21人であった。

当初1・2年生は老津校舎で、3年生は杉山校舎というように学年別に分散授業が行われた。生徒たちは通学や勉強に不自由な目に合いながらも、理解しあい、互いに交流を深めていった。第1回卒業生の松井将浩氏は「章南中になって大変だったことは通学が不便だったことです。私は3年生だったので、目と鼻の先に学校があるというのに わざわざ杉山まで通わねばなりませんでした。上り坂があって、今の自転車のように切り替えはなく、また道路は砂利ばかりだったので、特に雨や風の強い日の通学は大変でした。部活動は老津校舎中心に行われたので、部活動に入っている子は、老津に杉山にと場所を移動しなければならず大変だったことを覚えています」と話してくれた。



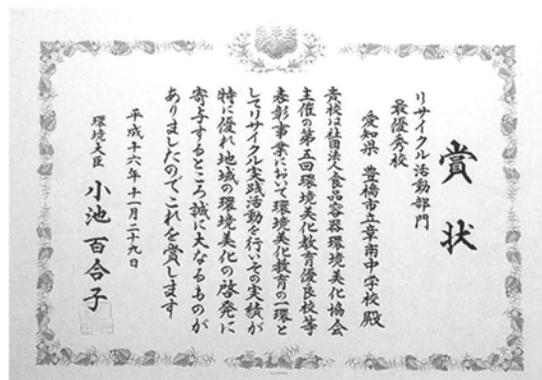
章南中学校玄関

高まる教育活動 教育活動においては、老津小学校、杉山小学校、章南中学校の三校連携活動を充実させ、校区の特色を生かす小中一貫教育を推進し、学習、生活、健康安全などの指導を積極的に行っている。また「生徒が主役」をモットーとして学校生活のあらゆる場で生徒の自主性が養われている。

今後ますます多様化するであろう現代社会の中で、よりよく生きる若者の育成を校区民は願ってやまない。

環境大臣賞受賞 平成16年11月、章南中学校(牧野章弘校長、227人)が第5回環境美化教育優良校事業のリサイクル活動部門で「環境大臣賞」を受賞した。長年続けている校区挙げての資源回収に加え、校舎屋上に設置した風車による発電、汐川干潟のクリーンアップなど幅広い環境教育の実践活動が高く評価されたのである。

牧野校長は「人々が協力的で、校区のまとまりがよく、自然につながる風、海、鳥など幅広い環境意識を理解してくれた点がうれしい」と話していた。



環境大臣賞

(4) 家政高等専修学校

① 家政学校の起こり

村立老津家政学院 戦後の混乱した時代に、将来、家庭を守り育てる子女への教育の大切さを思い、村民の要望により昭和23年(1948)、村立老津家政学院として発足した。村会議事

堂を仮校舎として院長 高橋とも先生と専任講師1名、兼任講師2名で開校された。

② 老津村立高等家政学校

授業内容 昭和24年(1949)に校名を改称し、4月14日付で県教育委員会より、学校設置認可証が下付された。授業内容は、和裁・洋裁を中心に茶道・華道など、女子としての技能習得に重点が置かれていた。開設当時の校舎は現在の老津小学校体育館辺りにあった。

③ 豊橋市立高等家政学校

昭和30年(1955)3月1日、豊橋市に合併し、豊橋市立高等家政学校と改称された。

経営目標と授業 「本校は、女子に必要な家政教育並びに精神教育を施し、将来、家庭婦人として常識豊かな、生活に即した女性の養成」として本科2年、研究科1年で再スタートした。必修教科の中に体育・音楽を加え、週35時間で、習字・珠算は課外として残した。技能取得だけでなく、教養にも力を入れた。

④ 豊橋市立家政高等専修学校

生涯学習の進展により、各種学校のうち教育内容と学校施設が充実している所を「専修学校」に格上げを図る文部省の方針が出され、昭和51年(1976)7月1日より豊橋市立家政高等専修学校と改名した。

従来、和裁と洋裁技能を重点にしていた頃と異なり、調理、華道など幅広い教養と技能が習得できるようになった。また昭和63年(1988)からは大学受験資格も与えられ、短期大学・大学への道も開かれた。

文化祭 昭和47年(1972)から55年まで、豊橋市の文化会館で2日間にわたり、作品展を盛大に行い、1000人を超す入場者があった。昭和56年より高縄代の新校舎において文化祭を実施し、地域に密着した文化祭として成果を挙げている。



豊橋市立家政高等専修学校

開かれた学校 昭和56年(1981)より、一日体験入学を実施し、広く生徒・保護者の理解を得る方法が続けられている。

また、市内各校区PTA対象の料理講習会など、学校外の方々にも学校を開放し、開かれた学校として地域社会に貢献している。

(5) 老津保育園

① 保育園の開園

村の保育所 農業や漁業で多忙な家庭が多い老津には、戦前戦後を通して幼児を預かる保育所はなかった。しかし、農繁期には村で託児所を開き、女子青年や住職・小学校高学年の児童や先生などによって、幼児の世話をしてきた。そこで、働き手としての父母や村の要望に応え、昭和27年(1952)、当時村長であった彦坂壮一氏を中心に村の託児所として村立の老津保育所を設立した。園舎は、戦前戦後に渡り村の共同養蚕のために使用してきた老津村宮脇73番地にある蚕室が当てられた。この保育所が出来たことで、村の人々は安心して農業や漁業に従事することができ、大変喜ばれた。開園当時、保母として勤務されていたのは、昭和50年(1975)から園長をされた彦坂さわ先生をはじめ7人だった。

当時、通園については、早朝から保母たちが各字をまわって子どもたちを集め、子どもたちと一緒に園に入った。午後3時半になると保母が字ごとに送って行った。池上方面は

遠くて一本木（神別坂）まで送って行ったこともしばしばあった。

② 老津町の保育園

新しい園舎 昭和30年（1955）、豊橋市へ合併にともない経営が老津保育園運営委員会となった。園舎も新築移転した。当時としては、大変施設設備のよい新しい園舎であった。遊具の数も増え、整えられた。保母たちは村の大切な子どもを預かり、保育するという使命感を持って保育に情熱を傾けた。

放送教育研究会 昭和32年（1957）、市から“放送教育研究大会東海北陸大会幼稚園の部”の



昭和30年頃の老津の保育園

指定を受けた。園をあげて「テレビを保育に生かして」というテーマで、老津保育園放送教育研究の公开发表を行った。

経営の法人化 昭和43年（1968）7月、老津保育園運営委員会を法人化していく準備として、市内全保育園が豊橋市社会福祉協議会へ入会した。そして昭和45年12月、4園で南部保育協会が発足した。昭和46年1月、豊橋の南部9園（豊南、高塚、野依、芦原、谷川、二川東、春日、東山、老津）で豊橋南部保育事業会を設立した。

③ 豊橋南部保育事業会・老津保育園

通園と園舎の移転 昭和40年代に入り、猿投町の集団通園児の痛ましい交通事故がきっかけとなり、全市的に通園時の送迎は保護者の責任で行われるようになった。初めは自転車の送迎であったが、軽トラックや乗用車に変

わってきたので通路が狭く、進入路が混雑するようになった。

移転後20年を経過した頃から、園舎の老朽化も目立ってきた。その頃、老津家政高等学校の新築移転問題に伴い、町の強い要望が実り、現在地へ新築移転された。

園児数の推移 開園時と比べると、園児の数は時代とともに変化し、平成に入ってからには特に減少の傾向にある。

戦後のベビーブームでは大勢の園児が通園したが、最近の出生率の低下により園児数の確保が深刻な問題となっている。

年度	定員	平均人数	平均入所率
H.元	180名	147名	81.9%
H.4	180名	141名	78.1%
H.7	160名	125名	78.4%
H.10	150名	148名	98.8%
H.13	150名	145名	96.4%
H.17	150名	130名	86.4%

園児数の推移

近代的な園舎 時の建設委員長、鈴木忠夫氏が中心となり、厚生省への陳情・市への交渉を行い、町民の要望に沿うよう園舎建設が進められたのである。昭和56年（1981）3月、家政学校の跡地に近代的な鉄筋二階建てペランダ付園舎の完成をみた。



新しい保育園

2 社会教育

(1) 青少年教育

老津校区における青少年教育は、老津小学校区としての健全育成活動と章南中学校、杉山小学校との合同健全育成活動（3校合同青少年健全育成会）として実施している。この活動と同時に「社会を明るくする運動」を進め、各種の行事を行っている。

老津校区青少年健全育成会 PTAと連携して、夏休み中のパトロールを実施し、校区内及び周辺の公園、コンビニ店、駅周辺での子どもたちの安全と非行防止に努めている。



パトロール中の総代・女性部

現在、子どもを取り巻く環境は、非常に悪化し「子どもの命を守るためにどうしたらよいか」が大きな社会問題になっている。

老津校区としても、小・中学校のPTAを中心に各方面の協力を得て「老津校区子ども見まもり隊」を結成した。子どもの下校時、外出時に不審者から子どもを守ることを目的として活動をしている。

章南中・老津小・杉山小3校合同青少年健全育成会 章南中学校区では、青少年の健全育成活動を「小・中学校の連携を重視した活動」と位置づけ、3校が合同で推進している。

平成17年度は、章南中学校において記念講

演会を実施した。「朝食と脳の栄養について」と題して、栄養士の杉浦孝行氏が講演した。



青少年健全育成会記念講演
「朝食と脳の栄養について」

社会を明るくする運動 子どもたちを守り、健やかに育つことを願って運動を進めている。

保護司、更生保護女性会が中心となり「講演会」「一日相談室」「巡回補導」「小・中学生の標語募集」「あいさつ運動」などを実施している。

スポーツを通しての健全育成活動も実施されている。社会の変化とともに子どもたちの住む環境も大きく変わっている。ゲームに熱中し、屋外で遊ばなくなった子どもたち、友達とうまくコミュニケーションが取れなくなった子どもたちが増えている。この子どもたちのためにスポーツを通しての健全育成活動が行われている。

老津少年野球団 この野球団は創立20周年を迎えた。昭和61年（1986）に設立され、今泉正彦代表、コーチの指導のもと、大勢の老津の野球少年を育てたのである。

設立の趣旨は、青少年の健全育成である。野球を通して、基本的な生活習慣を身につけ、礼儀正しい人間の育成に努めている。

年間を通し、主として土曜日、日曜日に老津小学校グラウンドで練習を行っている。最近、市内大会でも好成績をあげ、県大会へも出場

をしている。

今泉代表は「何か一つ特徴のある技を身につける」「NO.1は難しいが、あいさつでも一番になれたらよい」「老津少年団からプロ野球選手が出てほしい」と話している。



創立20周年記念行事

プレジール章南（サッカー）「プレジール」とは「楽しく」というフランス語である。このクラブは、平成15年に設立され、平成16年に「豊橋スポーツ少年団」に加盟している。

西崎幸一代表、12名のコーチの指導を受け、老津小、杉山小、大崎小の1年から6年までの男子52名と女子3名が活動している。

練習は、年間を通して火・水曜日の夜（老津小グランド）と土曜日の午前（大崎小グランド）で行って、楽しみながら『運動能力』の発達に努めている。

試合は、年間トーナメント大会6回、リーグ戦8回に出場して健闘している。この他に年間1～2回、お楽しみ会を行っている。



練習の様子

老津ミニバスケットボールチーム バレーボールクラブと一緒に活動していたが、平成16年に独立して設立されたチームである。

松井幸枝代表、コーチ6人のもと老津小学校3年生から6年生までの女子児童28名が参加している。練習は、年間を通して毎週土曜日の午後、老津小学校体育館で行われ、ウォーミングアップの後、ドリブル、パス、シュートの連携プレーを練習してからフォーメーションプレー、ゲームを実施している。

松井代表は「時には他チームとの交流試合をして、練習の成果を確かめたい。将来、子どもたちが中学校や高校でバスケットボールを続けてもらえればよい」と話している。



老津ミニバスケットボールチーム

老津小G & Pバレーボールクラブ 平成14年に学校週5日制が導入されてから、子どもたちが土・日曜日を有効に過ごすために設立された。正式にバレーボールクラブとして活動を始めたのは平成16年度からである。

現在、横田利文代表のもと、コーチ4人と老津小学校4年生から6年生までの女子児童26名が元気いっぱい練習に励んでいる。練習は6人制バレーで、年間を通して毎週土曜日

の午前中に行い、ウォーミングアップの後、レシーブ、アタックの練習をしてからフォーメーションプレー、ゲームを実施している。

横田代表は「現在、他チームとの試合を行う予定は無い。この経験を生かして将来、子ども達がバレーボールに親しんでもらえればよい」と話している。



老津小G & Pバレーボールクラブ

(2) 生涯教育

老津には、インディアカ、バレーボール、ソフトバレー、軟式野球（男性）、ソフトボール（女性）などの愛好会がある。それぞれの大会へ出場し、スポーツを楽しみ、親睦を深めている。ソフトボールチームが16・17年度に地区大会で優勝し、市内大会で3位の好成績をあげている。

スポーツの他にも文化的な愛好会がある。老津校区市民館、老津町公民館を利用した活動が続けられている。

ソフトボール 昭和60年（1985）10月から活動し、小清水とくえ監督をはじめ、12名の女性部員がチームワークよく練習に励み、市民オリンピックでは9年連続で優勝している。硬い守備と強力打線が売り物で、ヘッドスライディングあり、ファインプレーありのファイト満々のチームである。

インディアカ 毎年5月にスポーツフェスティバル・インディアカ大会が開催されている。老津からは、総代、女性部、体育委員がチームを編成して参加している。スポーツを通し

て親睦を深め、さわやかな汗をかいて楽しいひとときを過ごしている。

バレーボール 河合由美さんを中心にバレーボール同好会があり、10ブロックバレーボール大会に老津の代表として出場している。

ソフトバレー 毎年、スポーツフェスティバル・ソフトバレー大会が開催され、老津からは同好会「ラビット」チーム及び総代、女性部、体育委員の混成チームが参加している。

軟式野球 鈴木三男監督のもと、校区内に住む野球愛好家で構成され「スポーツフェスタ」の軟式野球の部に老津の代表として参加している。18年度は3位であった。

趣味の会（愛好会） 老津校区には、次のような趣味の会があり、毎年11月に行われる芸能発表会に練習の成果を発表している

団 体	教 室	代表者氏名
こぶな会	舞 謡	野田 和子
和の会	民 謡	豊田 好子
日本壮心流昭武館	詩 舞	松井智恵子
詩 舞	詩 舞	彦坂 照子
昌心会	詩 舞	松井 恵子
春日昭武館	詩 舞	中村 弘子
カトレア会	カラオケ	太田 克己
喚城会老津道場	詩 吟	松橋 正明
瀧佐和会	民 謡	松井 英代
みやび会	民 謡	越野 愛子
琴笠会	大正琴	小清水美智子
喜楽会カラオケ教室	カラオケ	大羽 利治
喜楽会詩吟教室	詩 吟	西崎 任
喜楽会老津俳句同好会	俳 句	高柳 精
喜楽会絵手紙	絵手紙	中村 弘子
喜楽会書道部	書 道	彦坂すみ子
喜楽会短歌を楽しむ会	短 歌	柵木 良行
喜楽会フォークダンス	ダンス	伴 匡晃
喜楽会グランドゴルフ	ゴルフ	鈴木 誠一
喜楽会ゲートボール	ゲートボール	鈴木 誠一
喜楽会ベタンク	ベタンク	牧野 和廣

3 史跡と文化財

(1) 古墳と古墳群

古墳とは3世紀末ごろから7世紀にかけて、人々を支配し、富と権力をにぎった豪族とその一族の墓である。

老津の古墳群 (●は古墳)



妙見古墳 全長約42m、後円部の径22.5m、後円部の高さ5m、前方部の幅20mの大きさの前方後円墳である。

老津村史には「中は6畳ぐらいあって遊べたが、明治中期に天井の大石が落ち、南西に入り口をもつ横穴式石室が開口していた」と記されている。豊橋市内最大級の古墳である。



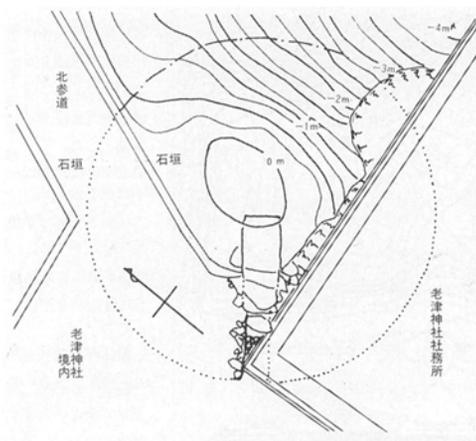
妙見古墳

宮脇1号墳 老津神社の境内の東部にあり、直径14m、高さ2.2mの円墳である。豊橋市埋蔵文化財調査報告書第76集には「出土した須恵器の蓋は6世紀末から7世紀初頭のもの」と比定される。宮脇1号墳は、西に渥美湾を、東に半島を縦断する主要道を臨む陸と海の交通の要衝にあり、被葬者は、交易や軍事などに重要な役割をもつ地方豪族の一員であったろう」と記されている。調査は平成元年(1989)8月21日より12月17日まで行われた。出土した遺物の中に金銅装大刀がある。

柄頭のないことは残念であるが、その外装を知ることができる貴重な資料である。

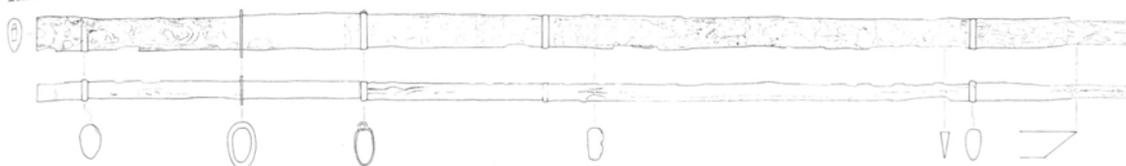


宮脇1号墳



宮脇1号墳平面図

金銅装大刀1



宮脇1号墳より発掘された金銅装大刀

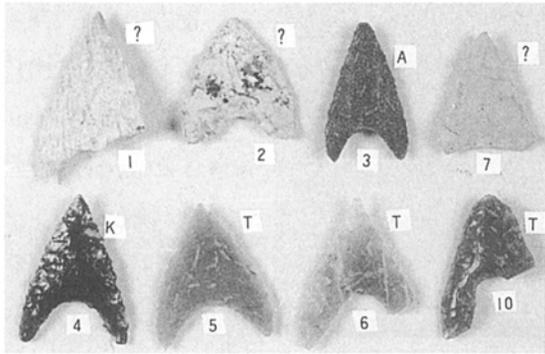
(2) 老津周辺の遺跡

氷河期が終わり、気温があがり海水面が上昇すると、貝類の生活しやすい浜辺ができた。狩ができ、食べられる野草や木の実などの採集に加えて魚介類を採ることが盛んになり、各地に貝塚が残されるようになった。

田原市の吉胡貝塚を始め、豊橋市内でも小浜貝塚、坂津貝塚、水神貝塚などが作られた。

① 石鏃 (やじり)

東聖の松井静雄氏、森崎の高柳庫吉氏、向田の彦坂兵衛氏の三氏により石鏃が採集されている。



石 鏃

御山塚 (山の神信号の北東付近) の石鏃 森崎の高柳庫吉さんは昭和5年(1930)から昭和15年にかけて御山塚の畑を耕しながら石鏃を20個採集し、現在も大切に保管している。御山塚あたりは、標高20m位で遠くまで眺めがよく、すぐ北には新池や石穴池があり、その付近には豊富な湧水がある。草創期から晩期までの石鏃が含まれる。古墳及び貝塚からの出土品が小学校に展示してある。

向田の石鏃 向田の彦坂兵衛さんは、自宅の北に当たる台地の裾から湧き出る清水(付近の人々は“向田のいどや”と呼ぶ)の近くに貝塚を発見した。石鏃などを採集したが、土器のかけらや貝類などはブルドーザーで崖下へ埋めたという。

石鏃は地元産のチャートがほとんどである。石鏃のほかには石錐(きり)がある。また直

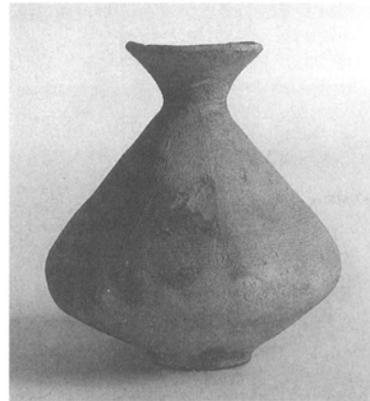
径30cmほどで、厚さ10cmほどの石皿と思われる中央のくぼんだ石器が1点ある。

出土地 石材	飛原・ 一本木・ 東聖	御山塚	向 田
全体の数	4 5	2 0	1 9
チャート	1 8	1 5	1 5
石英安山岩	6	3	1
サヌカイト	6	1	3
黒曜石	5	1	0
その他	1 0	0	0

東聖の石鏃 東聖の松井静雄さんが飛原や東聖などで集めた45個の石鏃がある。

② 石器・土器

波入江の土器 昭和44年(1969)波入江の祥雲寺裏山の土取り工事のとき掘り出された壺を向田の彦坂兵衛さんが採集し、大切に保管



してきた。この土器は瓜郷式土器であり、老津と大崎の間を流れる境川のつくる湿地帯で米作りを実証する貴重な資料である。

波入江の祥雲寺裏山で発掘された壺 。

③ 貝 塚

中尾貝塚と出土品 中尾の中ほどに伏見稲荷と秋葉神社が祀られている直径10m、高さ3mほどの土盛りがある。古墳のようにもみえるが、これは東中尾一帯に広がっていた貝塚の一部が削り残されて小丘状になったものである。中尾東方高地の伴旭氏の住宅付近一帯である。「大正15年(1926)の秋、波入江の原田新治氏が畑普請を施したとき、その一部から石斧を掘り出した」と老津村史(昭和33年刊行)には詳しく述べられている。

原田新治さん宅に磨製石斧が保存されている。また老津小学校の“石器、土器の陳列ケース”の中には13個の石斧があり、その1個に“波入江発掘”と墨書きされたものがある。**波入江207貝塚** 地籍上の番地をとり“波入江207貝塚”と命名された。出土した260個の骨は、犬山市にある京都大学霊長類研究所の相見満博士(豊橋市出身)に鑑定を依頼した。



貝塚の動物たち

さらに、出土した貝は豊橋市自然史博物館の松岡正志氏に鑑定を依頼した。

貝の名	南東	中央	北西	計 (%)
マガキ	28	31	33	92 (40)
ハマグリ	37	29	13	79 (35)
アサリ	11	8	8	27 (12)
オオノガイ	9	8	2	19 (8)
アカニシ	1	2	3	6 (3)
オキシジミ	2	2	1	5 (2)
計	88	80	60	228 (100)

波入江207貝塚の貝の種類と量

老津公園北貝塚 平成2年1月、当時老津小学校4年の西崎愛さん、鈴木美絵さん、松井康枝さん、高柳美穂子さん、西山絢子さんの5人の児童によって今下の老津公園北から平安時代前期から中期にかけての貝塚が発見された。

貝の名	数	(%)
ハマグリ	77	54
アサリ	26	18
マガキ	25	18
オキシジミ	7	5
アカニシ	5	3
オオノガイ	3	2
計	143	100

老津公園北貝塚の貝

(3) 老津古窯群

老津町切山古窯址は昭和45年(1970)芳賀陽氏(日本考古学協会)が担当して発掘調査した。



のぼり窯

(4) 老津の3古城

高縄城(大津城) 創建者は彦坂小刑部と伝承されているが、はっきりしていない。

文明7年(1475)ごろ、碧海郡上野(豊田市上郷町)から進出した戸田宗光によって構築されたとみる考えもある。

宗光が、文明10年(1478)に田原に移るまでの3年間の在城であった。

波入江城 戦国期、田原を本拠として東三河の平野部に勢力を伸長させた戸田氏の支城のひとつである。城跡は祥雲寺境内の一带であったと考えられ、昭和30年代までは空堀や井戸跡が確認された。今はその遺構を示すものはない。

北浦城 田原を本拠とした戸田氏の支城のひとつである。大崎城から田原を結ぶ三河湾沿いの防衛拠点であった。

(5) 老津の古社寺

① 老津神社

古くは八王子権現或いは八王寺宮と称していた。明治2年(1869)八所社と改め、更に明治43年(1910)村内無格社神明社、三島社の両社を合併して、同年6月18日に村名に因んで老津神社と改称した。

境内の社

ア 稲荷社	ケ 今宮八幡社
イ 鎌山社 <small>くわやま</small>	コ 秋葉社
ウ 西宮社	サ 御霊神社
エ 天神社	シ 神明社
オ 塞神社 <small>さいのかみ</small>	ス 三島社
カ 山之神社	セ 素戔鳴社
キ 熊野社	(明治初年に天王
ク 若宮社	社から変わった)



老津神社

② 太平寺(薬師如来)

本尊の薬師如来は立像で高さ5尺(約150cm)で春日作といわれている。

太平寺領目録 この目録は詳細を極め当時の土地の事情を知るうえにも貴重な文献であり、市の文化財に指定されている。

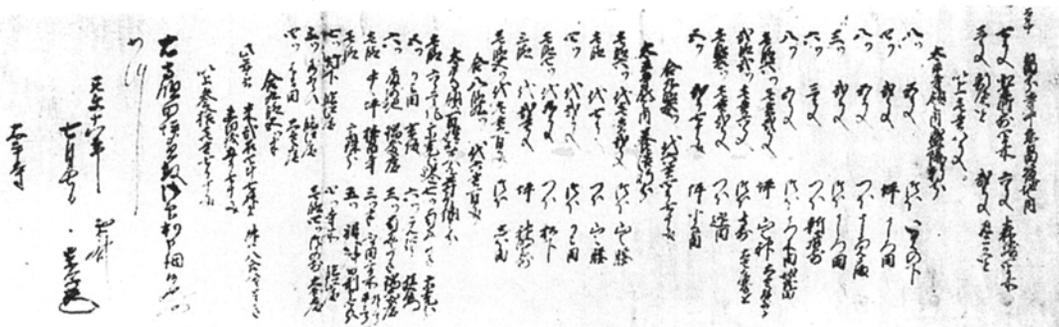
こうらいきょう
高麗経 紺紙金泥の写経で天地26.4cm、幅11.2cmの折本仕立て36折、その内扉の2折は変相図である。経文は一面6行17字詰で帙(文づつみ)に入れ、更に木箱に納められている。その帙をつくったのは文政4年(1821)8月である。

銅鐘 室町時代の特徴のある古鐘で、高さは竜頭21.2cmを加えて97cm、口径55.8cmある。伝来古く戦乱の際、武將に掠奪されるのを恐れ、地中に埋め置いた例は諸所に聞くが、これもそうであったとみえ、江戸時代末期に境内の山を崩して庫を建てる整地の時、偶然発見された。その色に年代の古きを語り、市内では最古の銅鐘として特に優れており、市の文化財に指定されている。

あかずの門 本堂の正面に“あかずの門”と呼ばれている門があり、常時は閉鎖してある。正月及び盆の三日間と住職晋山(僧侶が新たに一寺の住職になる)の時だけ開けることになっている。



太平寺



大平寺目録

③ 桂昌寺（聖観音菩薩）

寺伝によると元久元年（1204）開創せられ、桂昌庵と号した。最初は尼寺であったが、寛生4年（1246）宋の道隆禅師が鎌倉に赴く途中、伊勢より船出し海上暴風に会い、辛うじて大津の西岸に漂着し暫くこの地に留まって仏法弘通に努め、遠近の寺院皆随従してその教えを受けた。その時伽藍を修造し、小庵を改めて天香山桂昌寺と称した。道隆禅師が桂昌寺を発つとき、近在の僧俗男女皆別れを惜しんで泣き悲しんだという。その別れの地を今も鎌倉坂と呼び伝えている。



桂昌寺

④ 大雲寺（釈迦如来）

文保元年（1317）小林和尚開創と伝えられている。建物は文保元年創建、その後本堂再建を重ね、現在の本堂は大正元年起工、同4年に竣工したものである。平成元年頃より、この寺を“ダルマ寺”と、一部の人が呼ぶようになった。



大雲寺

⑤ 祥雲寺（釈迦如来）

延応元年（1239）祥雲庵として創立される。寺内に勢至堂がある。昔は勢至山にあったが、元禄寛永の頃寺内に移したといわれている。

祥雲寺の過去帳（宝暦5年—1755）には「大津郷氏神井寺院諸堂造建年代覚」があり安養寺や桂昌寺の創立、神明社、三島神社、八王子大権現などの記録はこれによる。



祥雲寺

⑥ 安養寺（阿弥陀如来）

熊野山と号し熊野の人たちによって建てられた寺であった。椰やしという木がある。これは暖地性の植物で熊野地方にはことに繁っている。この木の葉を熊野神社では神紋としていますが、鈴木氏もまたこの木の葉を家紋としているものがある。

承安3年（1173）に開基し、昔は七堂伽藍が備わっていたと伝えられているが、現在はその跡もない。また、幾度か改築し、宝暦2年（1752）には阿弥陀堂を改築したが、何れも明治31年（1898）9月の暴風のため破壊された。その後本堂は再建せられたが、大正15年（1926）寺号を豊橋市向山に移転し、老津町の同寺は廃寺になった。当時の本尊は大雲寺に移され阿弥陀如来を安置してある。

⑦ 多聞院・薬師堂（薬師瑠璃光如来）

承安4年（1174）の開基で、昔は七堂伽藍の備った立派なものであったと伝えられるが、その後諸堂は廃壊して今は僅かに医王殿と庫裡が残っている。本尊薬師如来は立像4尺（約120cm）で、春日の作と伝えられる立派なものであるが、中途修理の跡もあり相当傷んでいることは惜しいことである。薬師堂の裏手には、たくさんの五輪塔や宝きょう（宝石で飾った箱）印塔が集積されている。誰のものかわからないが、その様式の古さや大きさか



多聞院

ら見て、室町時代のこの地方の領主層のものと見てよいであろう。

⑧ 慈洞寺(虚空像菩薩)

明応3年(1494)の開基といわれている。本堂については、安永7年(1778)2月の再建の棟札がある。その後庫裡は天保3年(1832)に改築せられたものである。



慈洞寺

(6) お堂に集まる人々

老津には、太平寺(高縄代)、桂昌寺(大津中)、大雲寺(大津中)、祥雲寺(波入江)、慈洞寺(聖ヶ谷)、多聞院(北薬師・波入江)と寺院が多い。この他にも小さなお堂に近くの人々が10~20人ほど集まってお参りしている所がある。



多門田の観音堂



岩塚の十王堂



高縄代の地藏堂



聖ヶ谷の地藏堂



今下の観音堂



新居の姥神

4 人物、昔話

(1) 老津の偉人

私たちの住む老津は、歴史の古い町で伝説や名所、旧跡が多く、優れた人物も大勢輩出している。

名僧雪叟紹立禅師（～1593）

雪叟紹立禅師は、戸田忠次が大津村の領主であった頃に太平寺の住職であり、大変優れた高僧で忠次の厚い帰依を受けていた。

天正18年(1590)戸田忠次が伊豆の下田へ国替えとなった時、忠次に請い願われてそこに移り、その地で長松山太平寺の開山となった。雪叟禅師は、資質に恵まれ、特に詩才にたけていた。雪叟詩集より2編を紹介する。

佛成道 二首
老倒疎慵大法王
六年飢凍鬢吹霜
如今又出人間世
却指雪山是故郷

六白工夫雪一團
七條半破不堪寒
蓬頭垢面出山相
却彼梅花冷眼看

海を守った若き戸長中村吉五郎（1855～1881）

中村吉五郎は、安政2年に現在の老津中に生まれた。明治12年(1879)中村重右衛門の後を継いで25歳で老津村の戸長に就任した。老津村は、三河湾の穏やかな海に面し、貝や魚、海草などを採って生活をしてきた。しかし、この海をめぐる争いが絶えなかった。

天保5年(1834)老津をはじめ大崎、杉山、豊島、谷熊、吉胡、浦、波瀬村に広がる浜辺を埋め立てる計画が起こった時には、人々は大事な海を取られまいと強く反対した。これが老津村ほか七か村地先海面事件である。



中村吉五郎

明治7年に名古屋桑名町の堀田徳右衛門に海の地証券が下付されたため、老津をはじめ八か村は、これを不当として豊橋警察署に石黒宗左衛門を総代人として告訴した。

地券所有者、堀田徳右衛門に対し『好機逸すべからず、一刻も猶予すべきにあらず』と積極的にはたらきかけたのである。

堀田徳右衛門から密かに利益を与え、味方にしようとして誘われたが、村内民生の安定を願い、私心なくこれを断り、海を守ったのである。

鈴木悦の生涯（1886～1933）

鈴木悦は、明治19年、現在の老津町東中尾に生まれた。老津小学校を卒業後、田原町(現田原市)の山内商会(味噌醤油醸造業)へ奉公にやられたが「商人にありがちな嘘を言うことができないから商人には向かない。学校へ行かせてくれ」と父母に頼んでやめてしまった。

東京の成城中学を卒業して早稲田大学英文科に入学し、東京外国語学校(現外語大)へも通学した。



鈴木悦

明治43年(1910)早稲田大学を卒業した後、朝日新聞へ入社し、カナダのバンクーバーに渡り「大陸日報」の主筆として活躍した。この時「カナダ日本人労働組合」を設立し、日本人労働者の救済に尽力した。

帰国後、昭和8年(1933)に明治大学と上智大学で講師を務めたが、盲腸炎のために豊橋で生涯を終えた。老津へ帰った時、桂昌寺入口にあった石橋を「アメリカ橋」と呼ぶコンクリート橋に作り変えたことは有名である。



アメリカ橋

耕地整理に尽力した中西重平 (1857 ~ 1943)

中西重平は、安政4年に大津村（現在の老津町森崎）で中西勘七の長男として生まれた。

重平は29歳の若さで町村制施行の第1回の村長に就任し、その後村長就任4回、在職通算17年間の長い間行政にあたった。

その頃の老津村は、毎年大雨が降ると田畑に水が浸かり、一面の泥沼になっていた。



中西重平

そこで重平は、主だった地主を集め「耕地整理組合」を設立し、初代の組合長となり、10年あまりかかって耕地整理の工事を完成させたのである。

その結果、曲がっていた水路は改善され、小さな土地をまとめて大きくしたため、二毛作ができるようになり、収入も増え、人々は大いに喜んだのである。

重平は「耕地整理誌」の序の部分で「前略、今や整然たる耕地並びに道水路を目撃して従前を偲び比較する時、感慨無量なるを覚ゆ。乃ち農耕上より見れば理想に近き現況も、時勢は刻一刻と推移し停滞する事なし。故に現在の理想も将来は如何に推移せんか。我らは心茲に致すとき、此の現在を祝福すると同時に更に将来を考慮する必要がある事を思う」とある。「現在のままで満足してはいけない」といましめることを忘れていないのである。

教育に生きる彦坂利作 (1870 ~ 1949)

彦坂利作は、明治3年に老津村字森崎で彦坂市兵衛の長男として生まれた。

利作は、明治26年(1893)に愛知県尋常師範学校を卒業し、渥美郡豊橋高等小学校の本科正教員として勤務した。明治29年に渥美郡老津尋常高等小学校の訓導、翌年には校長兼

任となり、以後30年もの長い間、教育の仕事に全精力を傾けたのである。

老津村史に「先生の子弟の導きは、時にきびしい父のように秋霜烈日で、何の容赦もないきびしいものであつたり、温浴あふれ理解しやすいようにていねいに繰り返して説いたり、飽きることがなかった」とある。

理学博士 彦坂忠義 (1902 ~ 1989)

彦坂忠義は明治35年に渥美郡老津村今下で父彦坂貞次、母ひろの9人姉弟の末弟として生まれた。

忠義は、小学校を終え、愛知県第4中学校(現時習館高校)に入学、4年で仙台二高へ進学し、東北帝国大学へと進んだのである。「相対性理論」の日本の権威、石原純先生の



彦坂忠義

教えを乞うためである。

研究一筋に生きた忠義は、東北大の助手時代に「原子核の平和利用

の研究」に命をかけて取り組んでいた。

理学博士の学位論文のテーマは「原子核エネルギー利用の一方法について」ウランウムの核分裂についての理論的研究で、世界の最先端の研究をしていたのである。

昭和19年、戦時下における研究の発表は、公にならず、後にアメリカの学者が同じ理論でノーベル賞を受賞したことは、忠義にとっては、非常に残念であった。理論の確立が早すぎたのである。



彦坂利作

(2) 老津の昔ばなし

老津に伝わる伝説は、海に関わることが多い。老津の北西部にある明海地区は、昔は広陵たる老津の海であったからである。今は埋め立てられて工業地帯になっているが、老津の人々は海で生計を立てていたのである。

木履石 字若宮の海中にあり、昔、神々が海上から当村に上陸せられた時、履かれたものが石化したものと言い伝えられる石であって、潮の干満によって出没する。

石舟と腰掛岩 渥美郡老津村に渡ってこられた神々が、その時乗ってきた石の船というのが、字若宮の海中に沈んでいる。それが旧の三月、節句の頃の大潮に時々^{へさき}触の部分を海上へ見せることがあるそうだ。

老津の氏神 渥美郡老津村の氏神さまは、紫雲^{れん}英草がお嫌いだ。それでこの村には、紫雲英草が育たない。また、この氏神さま、牛もひどくお嫌いになる。だから昔、この村では、決して牛を飼わなかったものだ。

桃の実らぬ村 老津村へ来られた神様がたは、「このあたり、桃がなっている筈だ。よく実った桃がほしい」と、村人に注文された。ところが村人、桃を借しんで「あいにくここでは花が咲いても、実がなりませんので」と、嘘をついて断った。それから、てきめん^{はす}に神様の罰があたって、この村では桃の実がならない。

鎌倉坂 昔、位の高いお坊さんが京都から鎌倉へ行く途中、海上で強い嵐にあった。その時あらわれた一羽の鳥に案内されて老津の小さなお寺に着いた。その鳥はその仏様だったそう。こうして助けられたお坊さんは、村人のために仏の教えを授けた。小さなお寺を立派にして、鎌倉へ旅立つことになった。村人たちは、別れを惜しみ、村ざかい（現在の多聞院と波入江の間を大崎に通じる坂道）までお送りした。

その別れを惜しんだ所を鎌倉坂と呼び、今に伝えられている。

○子どもが調べた伝説（平成元年当時）

ごひんさま（おじいさんから聞いた話）

おじいさんが小さいころ、もらいぶろ（自分の家におふろがないので、よその家のおふろにはいる）に出かけた時のことだ。少しいくと、川のところで赤い大きい火の玉がすごいはやさで左から右へとんでいった。川は火だらけのように見えた。おばあさんが「ごひんさまだ。神様はきたないものがきらいだから、はいているぞうり（わらでつくった履きもの）を頭の上へのせるといい」と言った。はじめて見てびっくりした。大正のおわりごろの話だそうだ。

新田 鈴木あさひさんの話 3年 鈴木孝政

新居のおみやさん（おかあさんから聞いた話）

私の家のうらには新居のおみやさんがある。そのおみやさんは女の神様だと言われている。その名前はうば神様と言うそうだ。よそのおみやさんはほとんどが男の神様ではないかと思う。私も新居のことを家族に聞いてびっくりした。どこから来たのかはよくわからないが、田原のどの様のうばをしていた人が来たということだ。今では1年に1回はその神様におばあさんたちが、あまざけをあげておまつりしている。

新居 太田やす江さんの話 3年 太田由美子

高縄代のうば（おじいさんから聞いた話）

お母さんの在所のご先祖様でむかし高縄城のおとの様のうばをやっていた人がいたそうだ。そのうばは、へび使いだったといい、たいへんまじめでいっしょうけんめい仕事をしたそうだ。うばがなくなったあとに、土地をくれたという。その土地は老津公園の上の畑の所で、そこへうば神様のお社を建てたそうだ。的場の在所にはその人が使っていたくしや鏡があるそう。

的場 彦坂貞男 田島幸世 故彦坂みよしさんの話

6年 田島徳子

ろくぼさの言い伝え（おじいさんから聞いた話）

中尾から東に山の神の交差点がある左側の畑の所で、ろくぼさというお坊さんが土を掘り瓶を入れ、その中に入ってお経をあげ、かねをならしながら入滅したそうだ。その瓶の中から聞こえてくるかねの音は一週間ぐらい鳴り響いていたと言う。

土地改良の時に瓶が出てきたそうだ。

お坊さんが瓶に入ったのは幕末のころ、近くの人でなく、港から下りて来た人らしい。もう70歳の年齢のため自分の死ぬ場所を決めたのだそうだ。

この言い伝えを聞いてとても驚いた。今から120年前のことが人の口から口へ言い伝えられ、伯父の目で証明されたからだ。

今は大雲寺に埋葬されているそうだ。

東中尾 伴保久さんの話 6年 伴知左登

経塚の松（おばあちゃんから聞いた話）

昔、太平寺におこぞうさんがたくさんいたそうだ。うら門の近くに井戸があり、その井戸におこぞうさんが落ちて死んでしまった。その供養に井戸の中にお経の本をたくさん入れて土をかぶり、そこへ松を植えた。この松を「経塚の松」と言うようになったと。

その松を切ったり、さわったり、折ったりすると罰が当たると言い、大切にしたそうだ。でも最近、松くい虫が松を枯らしたので、今は二代目が植えてあるそうだ。

高縄代 黒田やえさんの話 3年 黒田真人
5年 黒田千春

(3) 笹踊り

「てんのうとーともうするは——、日本一のあらがみだ——」「安養寺の縁の下、いたちのせがれが十二匹——」

昔、多門田海岸に天王社（今は老津神社に合祀されている）があり、盛大に「花火祭り」が

行われていた。天王鼻（現多門田信号付近）の海岸に設置された、各字の花火詰め所より、勢いよく若い衆が花火を打ちあげたのである。三寸玉、五寸玉、尺玉が揚がり、金魚花火が印象に残る。観客は、それぞれの持ち舟で海上から弁当を食べながら打ち上げ花火を観たのである。この時も笹踊りが主役であった。

また、安養寺は大津中の鈴木嘉章氏の畑にあった。今は大雲寺にまつられている。

昔から老津に伝わる笹踊りは、いったいどんな謂れがあって、なんのために、どのように伝わって来たのだろうか。

「笹踊りそのものは、あでやかな衣装、はげしい動き、その有様から朝鮮（現韓国）から伝わって来たのではないか。天皇の行幸に先立ち、知らせるための役割を果たしていたのではないかと思う」これは、大雲寺住職本多宗隆さんのお話である。

笹踊りは、近隣の豊川水域の各地で伝承され、今も祭りなどに舞われている。ただ、笹おどりに関わる文献は見当たらず、言葉や振り付けにより伝承されている。

老津では、この間まで中尾、森崎が交替で笹踊りを主催していたが、今では校区全体の催しとして老津神社に奉納されている。

踊り手は、大太鼓1人、小太鼓2人によって舞われ、太鼓の拍子に合わせて踊られる。お囃子は、各字から選ばれた若い衆が務める。



笹踊り

老津の仲間



▲豊橋市消防団第五方面隊老津分団の皆さん（平成18年度）
▼スポーツ同好会の皆さん



▲校区総代会の皆さん（平成17年度）
▼行事を計画する体育委員・女性部



▲スポーツ同好会の皆さん

▼お父さん・お爺ちゃんに遊びを教わる老津の子



▲頼もしい老津の若衆

老津の公共施設



▲消防団器具庫



▲町民の暮らしを守る駐在所



▲老津郵便局



▲校区の活動拠点 老津町公民館



▲町民の憩いの場 老津校区市民館



▲JA老津支店



▲地域の医療を支える中西病院



▲町民の足となっている渥美線



▲町を貫通する国道259号線

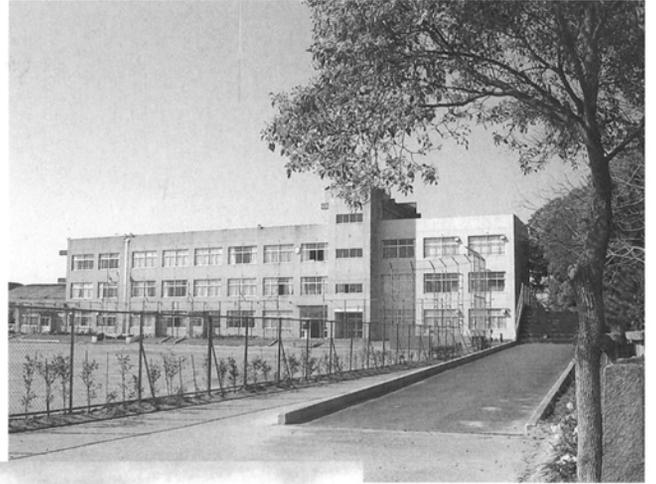


▲進む259バイパス工事（平成18年春 大津中地内）

老津の教育施設



▲現在の老津小学校



▲現在の章南中学校



▲昭和はじめ頃の老津小学校



▲昭和28年頃の老津中学校

かがやけ老津っ子



▲老津保育園



▲豊橋家政高等専修学校（高縄城址に建つ）

編集後記

文章を書き終えてみると、老津の歴史、伝統の深さや由緒ある土地柄であることを実感しました。

豊かな自然と、古くは神代の時代から語り告がれ、伝承された文化は、今も生活の中に生かされ、私たちの財産となっております。先人の努力によって築きあげられた文化を守り、後世に伝えていかなければならないと思います。

時代の流れとともに変化する社会において、時には変えなければならないことがあります。新しい老津をめざしてみんなで考え、住み良い町をつくらなければなりません。

今を生きる子どもたち、そして、これから生まれてくる子どもたちのためにも。



編集委員

松井朝男	小清水忠男	鈴木 敬
松橋正利	小清水重之	彦坂信行
松井将浩	松井 誠	中村 勝
太田善六	中村守男	
サポーター		
松井清和	金澤文美	

参考文献

- ・老津村史 昭和33年（1958）
- ・郷土誌老津 平成2年（1990）
- ・豊橋鉄道50年史 昭和49年（1974）
- ・豊田鉄工場 Company Brochures
- ・ファインモールド 会社案内

校区のあゆみ 老津

平成18年12月25日発行

編集 老津校区総代会
老津校区史編集委員会
発行 豊橋市総代会
印刷 共和印刷株式会社

R100
注釈配合率100%の再生紙を
使用しています。

PRINTED WITH
SOY INK
Product of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyotashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋